

沖縄国際大学 平成 25 年度 F D 支援プログラム成果報告書

下記内容により、F D 支援プログラムの取り組みが完了いたしましたので、「F D 支援プログラム成果報告書」にて、ご報告いたします。

報告者氏名	友知 政樹 	所属・職名	経済学部・教授
プログラム名称	新授業アンケートの分析方針の検討 — 本学学生の学びの把握と授業改善に有効な情報を得るために —		
実施及び成果の 要旨	本プログラムは泊真児先生（総合文化学部・准教授）ならびに渡久地朝央先生（経済学部・講師）による活躍が大変大きかった。両先生にそれぞれ報告書をご執筆頂いた。 泊先生の報告書における要旨は以下のとおりである。詳細は別添の「平成 24 年度授業アンケート報告書①」をご参照いただきたい。 前期アンケートと後期アンケートのデータをそれぞれ別にして、学生が授業から得たことの指標となる評価項目について、それぞれ重回帰分析を行った。具体的には、前期アンケートの場合、「授業についての総合評価（項目 12）」、「授業内容の理解度（項目 10）」、「講義テーマへの関心度（項目 11）」の 3 つを従属変数として分析を行った。後期アンケートについては、「授業についての総合評価（項目 25）」、「授業内容の理解度（項目 20）」、「授業の役立ち度（項目 26）」、「関連分野をもっと学びたいという意欲（項目 22）」の 4 つを従属変数として分析を行った。総じて言えば、今後の授業改善に向けて、学生のニーズや反応をアセスメントする側面と、学生にシーズを提供する、あるいは教員と一緒に“問い”を共有し、さらに探求し続けることの必要性を意識化させることが大切だと考えられる。 渡久地先生の報告書における要旨は以下のとおりである。詳細は別添の「平成 24 年度授業アンケート報告書②」をご参照いただきたい。 旧アンケートと 2013 年後期から始まった新アンケートに関する授業評価の変化について、その要因分析を行った。まず、旧アンケート及び新アンケートの授業評価項目（Input）を対象とした学生の授業に対する評価要因では、旧アンケートの授業評価項目（Input）部分において、新アンケートでも同様の分析結果が得られたことから新アンケートは旧アンケートを代替していると推測される。また、新アンケートに新たに付加された学生側の授業評価については、各学科において特に Q18「授業で学んだ個々の知識を結びつけて考えるようになった」及び、Q19「この授業を通して知りたかったことが学べた」が多く挙げられていた。		
実施期間	自：2013 年 4 月 1 日 至：2014 年 3 月 31 日		

※共同実施者

申請者氏名	渡久地 朝央	所属・職名	経済学部・講師
申請者氏名	金城 敬太	所属・職名	経済学部・講師
申請者氏名	桃原 一彦	所属・職名	総合文化学部・准教授
申請者氏名	泊 真児	所属・職名	総合文化学部・准教授



目 的	平成 24 年度後期から、新しい授業アンケートが導入された。本アンケートは従来のアンケートの項目（授業について問う項目）と新しい項目（授業に対する学生の理解度、関心・意欲の程度、満足度、学習状況など）を組み合わせたものである。従来のアンケートの結果分析は、アンケートの全体平均と項目ごとの平均をフィードバックし結果を把握するものであった。今回、新たなアンケートを実施したことを機に、以下の 2 つの目的にもとづいて、新授業アンケートの分析方針を検討する。 1. 授業アンケートの結果について、授業形態（授業、演習、実習）、科目（共通、専門、資格）、クラス規模、学生の属性（学年、学部、学科）などの多様な変数に基づいて、授業と学生の学びに関する項目の回答を分析し、本学の提供する授業の全体的な傾向や特徴を把握する。 2. 上記の授業全体の分析結果をもとに、個々の授業における授業の内容と学生の学びを関連づけて理解できるような有効な結果のフィードバック方法を検討する。
活 動 内 容	1. 平成 24 年度後期の授業アンケート結果について一次集計を行う。 2. 一次集計の結果にもとづいて、上記目的に述べたような多様な説明変数を設定し、質問項目への回答結果を二次分析する。 3. 二次分析の結果にもとづいて、本学の提供する授業の全体的な傾向や特徴を把握する。加えて、新アンケートの質問項目の尺度としての有効性を検討し、今後の新アンケートの実施、分析、フィードバックの方向性を検討する。 4. 二次分析結果とその解釈をもとに、個々の授業の状況を理解し、次年度の授業を計画する際に有効な情報が得られるようなフィードバック方法を検討する。
成果・結果・効果	別添の「平成 24 年度授業アンケート報告書①」ならびに「平成 24 年度授業アンケート報告書②」を参照。
今 後 の 展 望	別添の「平成 24 年度授業アンケート報告書①」ならびに「平成 24 年度授業アンケート報告書②」を参照。



FD 委員会 2013

平成 24 年度授業評価アンケートに関する報告書①

文責・報告者：泊真児（総合文化学部・准教授）

1. 授業評価アンケート分析の概要

平成 24 年度のアンケートは前期・後期の 2 区分であり、質問項目数は前期 12 問、後期 27 問となっている。前期アンケートの質問構成は、教員の授業の進め方に関する評価項目が 5 項目（項目 1～5）、授業科目の内容に関する評価項目が 4 項目（項目 6～8、10）、授業への学生自身の取り組みの評価が 1 項目（項目 9）、そして、授業の総合的な評価に関する 2 項目（項目 11、12）となっている。

一方、後期アンケートは、教員の授業の進め方や授業内容の構成を評価する「授業全体について感じたこと」が 12 項目、「授業を通しての学生自身の学び」に関する評価項目が 10 項目、さらに、学生自身の授業への取り組みを評価する 2 項目と総合評価に関する 2 項目があり、オプションで教員自身が設問を自由に設定できる 1 項目で構成されている。

新旧アンケートの評価項目には、共通しているものと異なるもの（追加項目）があるため、全てを一緒にして分析するわけにはいかない。ここでは、授業評価アンケートの尺度としての構造分析はさておき、各項目が授業の総合評価や内容理解にどのように寄与しているか明らかにすることを目的とした分析結果を報告する。確かに、前期と後期では評価対象の授業科目や評価した学生の構成・人数も異なるため、いささか乱暴な分析であるかもしれない。しかし、次の理由から、授業の総合評価と内容理解を規定する要因（項目）を分析することは有益であると考えた。すなわち、全学の授業全体の評価と各教員が担当する授業科目の評価は、自由記述回答も含め、既に各教員に個別フィードバックされている。後期アンケートに関しては、学生自身の出席割合と 1 週間の予習復習時間という 2 変数と各評価項目とのクロス集計結果が示されると共に、全ての評価項目間の相関係数表も示されている。しかしながら、それらの統計解析データが持つ意味や授業評価アンケートの結果全体から読み取れる特徴については、特に解説がなされておらず、専らフィードバックを受けた教員自身の読み取りに委ねられているのである。これでは、統計学的知識に乏しかったり、多忙を極めている教員にとっては、授業の長所や改善点、さらには学生自身の学びの実情について、短時間で効率的に把握することが困難だと考えられるからである。

そこで、本報告では、前期アンケートと後期アンケートのデータをそれぞれ別にして、学生が授業から得たことの指標となる評価項目について、それぞれ重回帰分析を行った結果を報告する。具体的には、前期アンケートの場合、「授業についての総合評価（項目 12）」、「授業内容の理解度（項目 10）」、「講義テーマへの関心度（項目 11）」の 3 つを従属変数として分析を行った。後期アンケートについては、「授業についての総合評価（項目 25）」、「授業内容の理解度（項目 20）」、「授業の役立ち度（項目 26）」、「関連分野をもっと学びたいという意欲（項目 22）」の 4 つを従属変

数として分析を行った。以下、科目区分（共通・専門・教職・資格）や教員区分（専任・非常勤）ごとにそれぞれ分析した結果を報告する。ただし、科目区分と教員区分をクロスさせた際に十分なデータ数がないものについては、分析を行わなかった。また、重回帰分析はステップワイズ法を用い、データ数 100 を超えるデータセットについては、説明変数投入基準を 0.1% 水準、変数除去基準を 1% 水準とし、100 未満のデータセットについては、それぞれ 1% 水準と 5% 水準に設定した。解析段階では、多重共線性の問題が起きていないか VIF に留意しながら分析を行った。

表 1. 2014 年度前期授業評価アンケートの評価項目一覧

評 価 項 目	
1	先生の話はよく聞こえましたか（声の大きさ、マイクの使い方など）
2	先生の黒板等（板書代わりの OHP、パワーポイント、ファイルなど含む）の使い方は適切でしたか
3	先生は学生の理解を助ける手段（テキスト、プリント、OHP、VTR、インターネットなど）を適切に用いましたか
4	先生の授業中の私語・携帯電話使用などの迷惑行為への対応はどうでしたか
5	先生は発言や質問の機会を設け、適切に対応していましたか
6	毎回の授業の構成はまとまっていたか
7	先生の授業内容はシラバスに沿ってまいりましたか
8	先生の授業内容の分量はどうでしたか
Input（設問 1～8）項目の平均値	
9	あなたのこの科目への取り組みはどうでしたか
10	授業の内容をよく理解できましたか
11	この授業を通して講義のテーマに関心を持つことができましたか
12	この授業について総合的にどう評価しますか
Output（設問 9～12）項目の平均値	

表 2. 2014 年度後期授業評価アンケートの評価項目一覧

評 価 項 目	
1	担当教員の話はよく聞こえた（声の大きさ、マイクの使い方など）
2	黒板など（板書代わりの OHP、パワーポイント、ファイルなどを含む）の使い方は適切であった
3	担当教員は学生の理解を助ける手段（テキスト、プリント、OHP、VTR、インターネットなど）を適切に用いていた
4	配付資料（レジュメなど）が授業内容の理解に役立った
5	授業のペースが、私にとって適切だった
6	授業の分量（内容・板書など）が、私にとって適切だった
7	毎回の授業の構成はまとまっていた
8	授業内容はシラバスに沿っていた
9	担当教員は授業中の私語・携帯電話使用などの迷惑行為に、適切に対応していた
10	担当教員は発言や質問の機会を設け、適切に対応していた
11	授業の中で前回の内容の振り返りがあり理解を深める工夫があった
12	この授業で学問のおもしろさを感じることができた
科目の授業全体（設問 1～12 項目）の平均値	
13	授業で学んだことを自分なりに例をあげて話せるようになった
14	授業で学んだことが日常生活や社会生活に役立った
15	授業内容について質問できるようになった
16	授業で学んだことを身近な出来事に結びつけて考えるようになった
17	授業内容を自分なりの言葉でノートにまとめられた
18	授業で学んだ個々の知識を結びつけて理解するようになった
19	この授業を通して知りたかったことが学べた
20	授業内容が十分に理解できた
21	授業内容について自分なりに調べてみようと思うようになった
22	この授業に関連する分野をこれからも、もっと学びたい
23	この授業の出席状況（実際に出席した割合）について下記の選択肢から選んでください（①60%以下、②70%程度、③80%程度、④90%程度、⑤皆出席）
24	この授業における1週間の予習復習の合計時間を次の選択肢から選んでください（①1時間未満、②1時間程度、③2時間程度、④3時間程度、⑤3時間以上）
25	総合的にみて、この授業を受けてよかったと思う
26	総合的にみて、この授業は自分にとって役に立った
あなた自身の学び（設問 13～26 項目）の平均値	
27	オプション（担当教員から設問、選択肢についての指示があります）

2. 前期アンケート（旧版）における授業評価の結果

2-1. 授業についての総合評価を規定する要因の分析

項目 12「授業についての総合評価」を従属変数として、それ以外の各授業評価項目を説明変数群に用いた重回帰分析（ステップワイズ法、以下全て同じ）を行った。その結果を順に示す。

以下の図 1 は、「共通科目の講義」に関するデータを用いた解析結果である。これより、共通科目の講義では、授業を通して講義テーマに関心を持つことができ、先生の授業の進め方が適切（板書や補助手段、発言や質問の機会の設定）で、内容をよく理解できた場合に、授業の総合評価が高まることを示している。

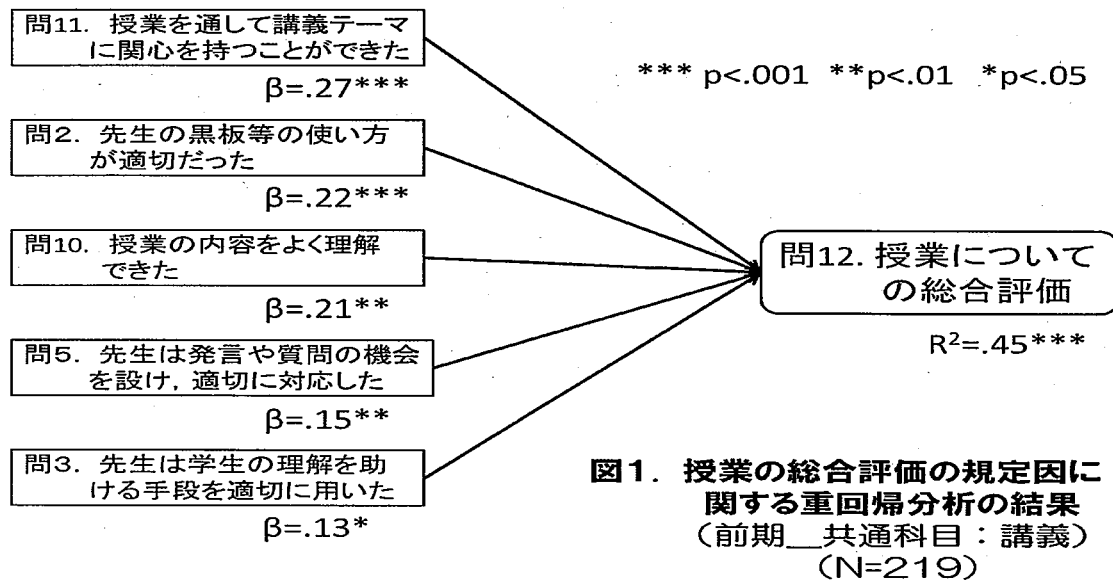


図1. 授業の総合評価の規定因に関する重回帰分析の結果
(前期__共通科目：講義)
(N=219)

次に、専門科目の講義を非常勤(図 2-1)と専任(図 2-2)別に分析した結果をそれぞれ示す。

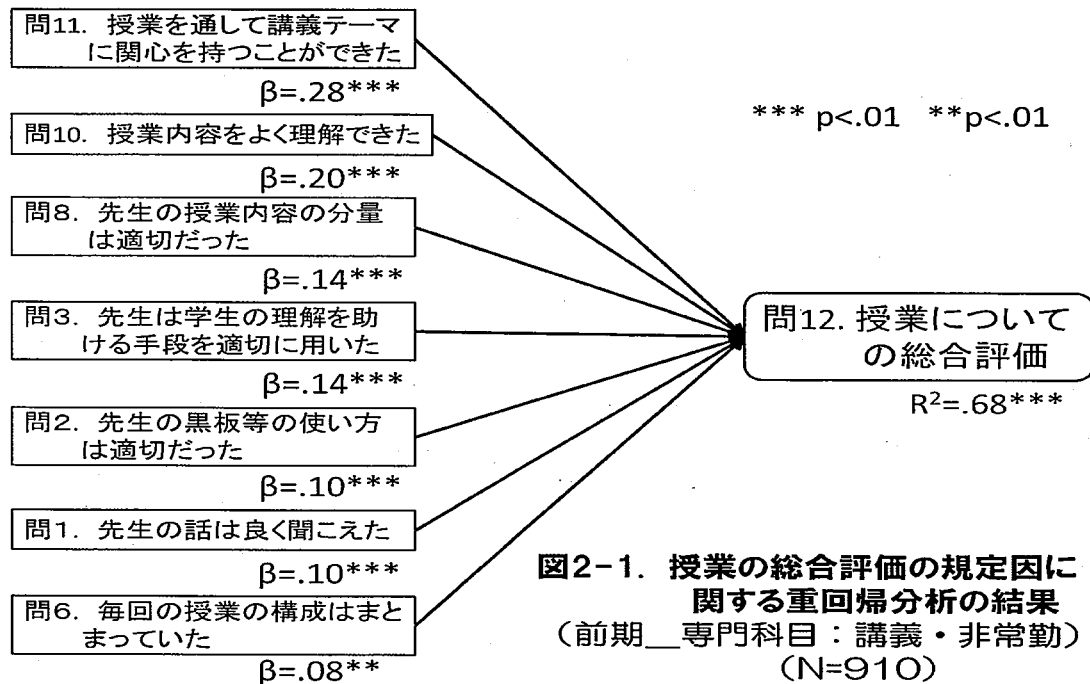


図2-1. 授業の総合評価の規定因に関する重回帰分析の結果
(前期__専門科目：講義・非常勤)
(N=910)

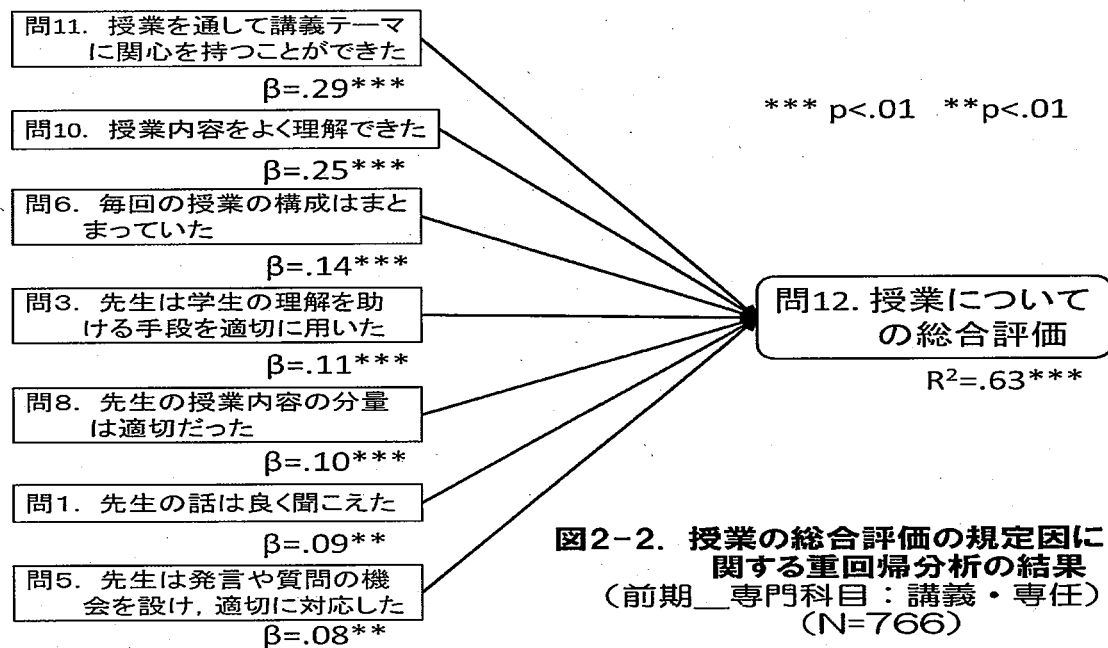


図2-2. 授業の総合評価の規定因に関する重回帰分析の結果
(前期_専門科目：講義・専任)
(N=766)

これより、専門科目の講義では、非常勤か専任かによらず、授業を通して講義テーマに関心を持つことができ、授業内容をよく理解でき、さらに、先生の授業の進め方や構成が適切（補助手段の活用、教員の声量、授業の分量やまとまり）である場合に、共通して授業の総合評価が高まることを示している。また、非常勤では項目2「板書の適切さ」が、専任では項目5「発言や質問の機会の設定」が総合評価に寄与していることが示された。

次に、専門科目の演習を対象に同様の分析を行った結果を図3に示す。これより、専門科目の演習では、授業を通して講義テーマに関心を持つことができ、教員の授業構成がよくまとまっていて、さらに学生自身の授業への取り組みが熱心であるほど、授業の総合評価が高まっていると言える。

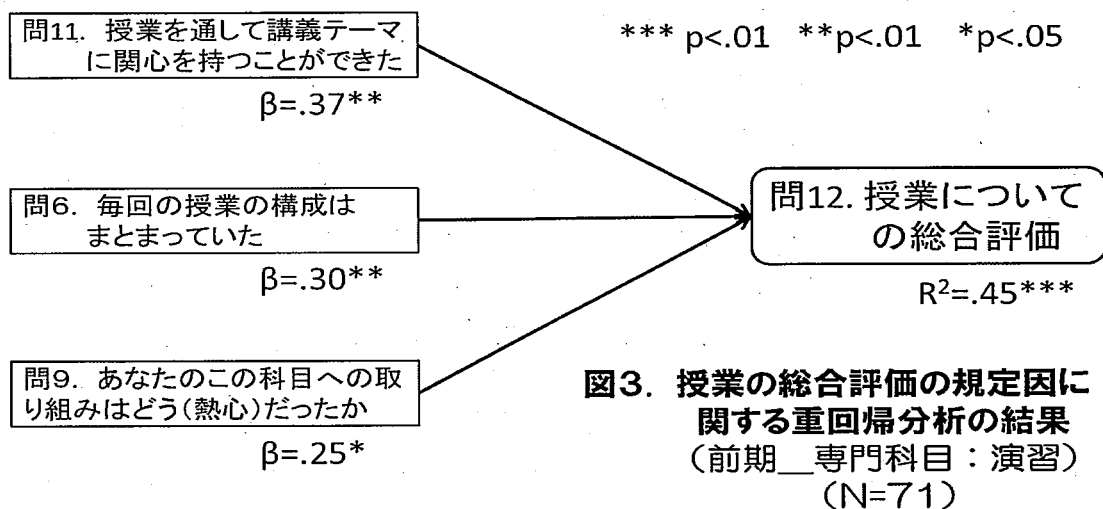


図3. 授業の総合評価の規定因に関する重回帰分析の結果
(前期_専門科目：演習)
(N=71)

図4は、資格科目の講義を対象に同様の分析を行った結果である。これより、資格科目の講義では、教員が学生の理解を助ける補助手段を適切に用いるなどして、授業内容がよく理解でき、授業中の私語・携帯電話等の迷惑行為のない良好な学習環境が保たれているほど、授業の総合評価が高まっていると言える。

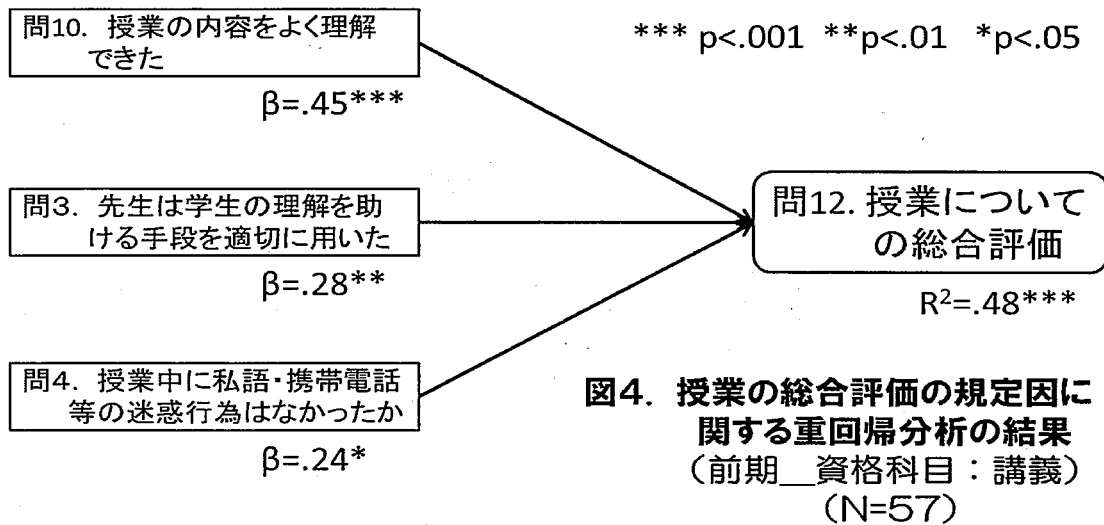


図4. 授業の総合評価の規定因に関する重回帰分析の結果
(前期__資格科目：講義)
(N=57)

図5は、教職科目の講義を対象に同様の分析を行った結果である。これより、教職科目の講義では、授業を通して講義テーマに関心を持つことができ、教員の板書の使い方や発言・質問の機会の設定と対応が適切で、授業内容をよく理解できるほど、授業の総合評価が高まると言える。

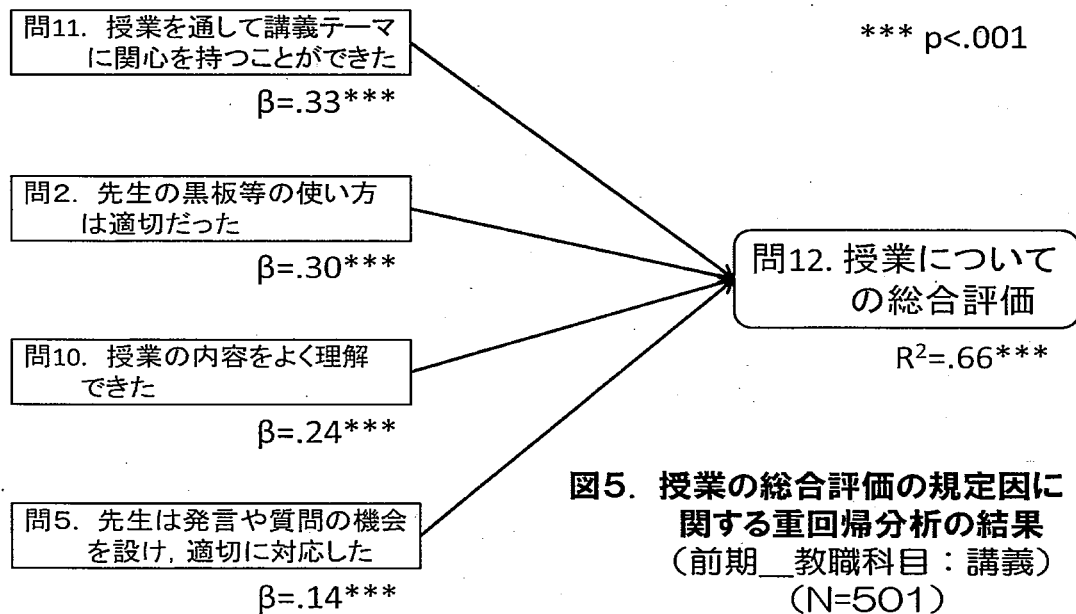
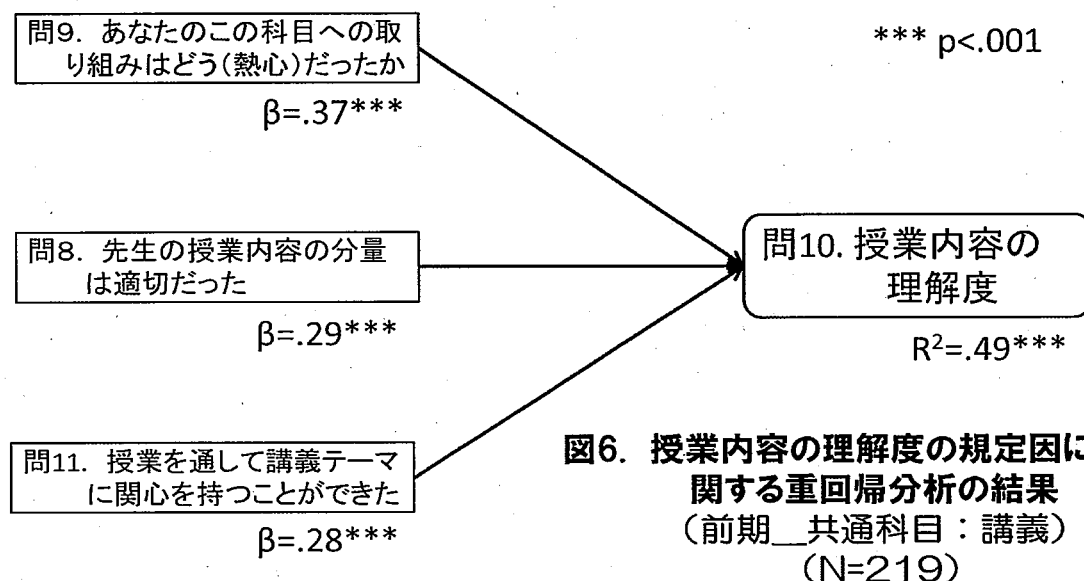


図5. 授業の総合評価の規定因に関する重回帰分析の結果
(前期__教職科目：講義)
(N=501)

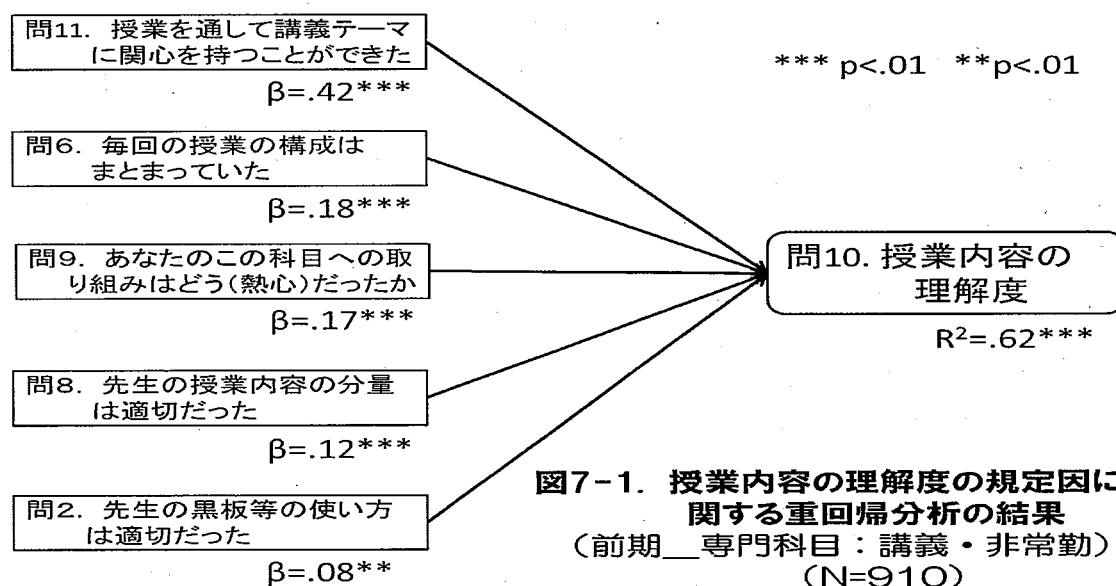
2-2. 授業内容の理解度を規定する要因の分析

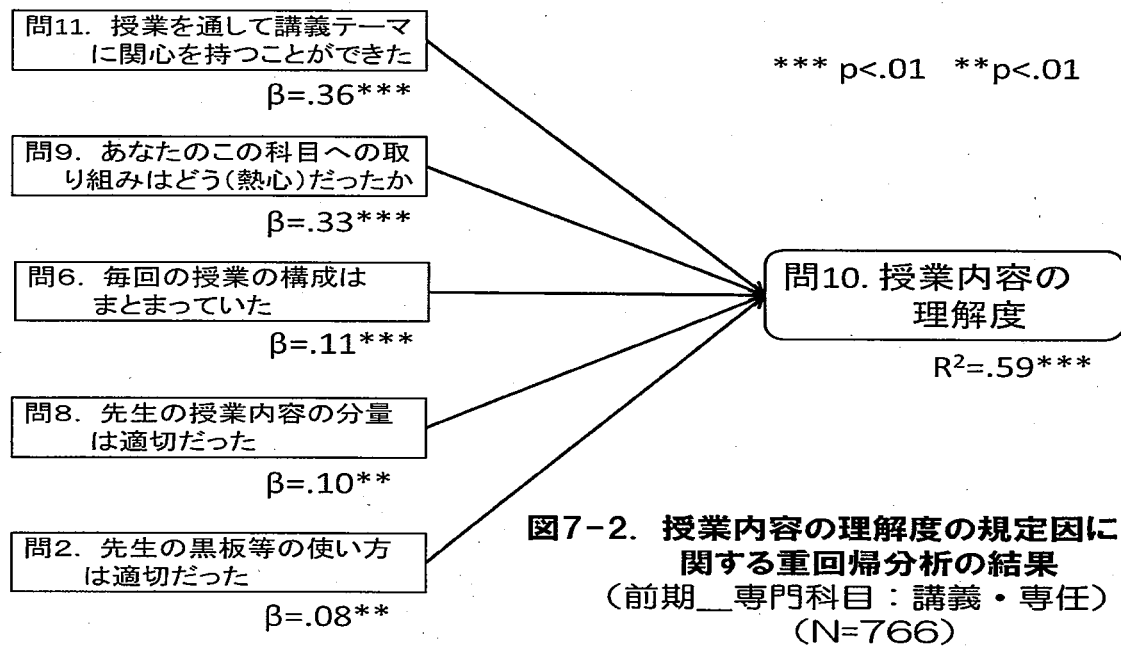
項目 10「授業内容をよく理解できましたか」を“授業内容の理解度”と称し、これを従属変数として「総合評価」の場合と同様の重回帰分析を行った。その結果を順に紹介する。

以下の図 6 は、「共通科目の講義」におけるデータを用いた解析結果である。これより、共通科目の講義では、学生自身の授業への取り組みが熱心で、教員の授業内容の分量が適切であり、授業を通して講義テーマに関心を持つことができるほど、授業内容の理解度が高まると言える。



次に、「専門科目の講義」を非常勤と専任に分けて分析した結果を、それぞれ図 7-1 と 7-2 に示す。これより、非常勤か専任かによらず専門科目の講義では、授業を通して講義テーマに関心を持つことができ、学生自身の授業への取り組み方が熱心で、教員による授業内容の構成・分量・板書の仕方が適切であるほど、授業内容の理解度が高まることが示された。





以下の図8は、専門科目の演習に関する重回帰分析の結果である。これより、専門科目の演習では、教員による授業内容の分量が適切で、学生自身が授業に熱心に取り組む、授業を通して講義テーマに関心を持つことができるほど、授業内容の理解度が高まることが分かる。

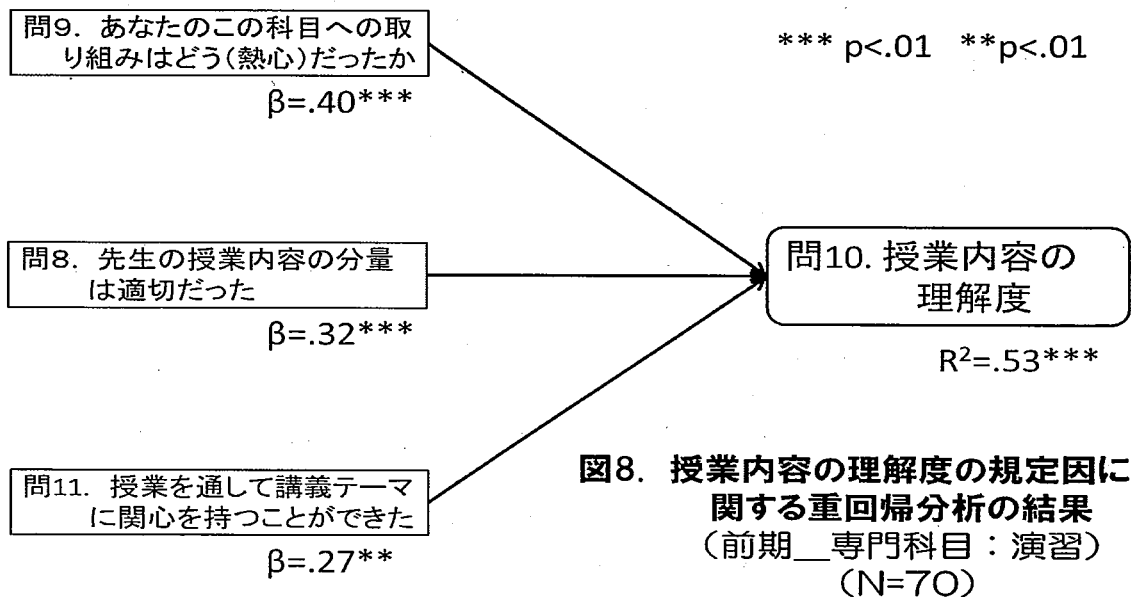


図9は、資格科目の講義における分析結果である。これより、資格科目の講義では、授業を通して講義テーマに関心を持つことができ、学生自身の授業への取り組みが熱心で、教員が発言や質問の機会を設けて適切に対応しているほど、授業内容の理解度が高まると言える。

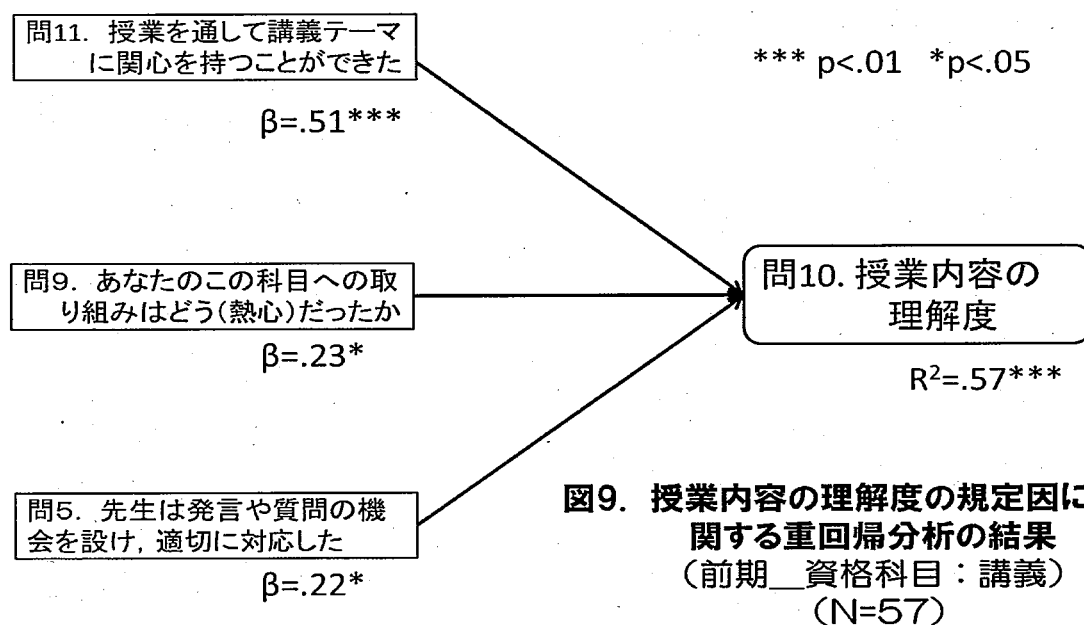
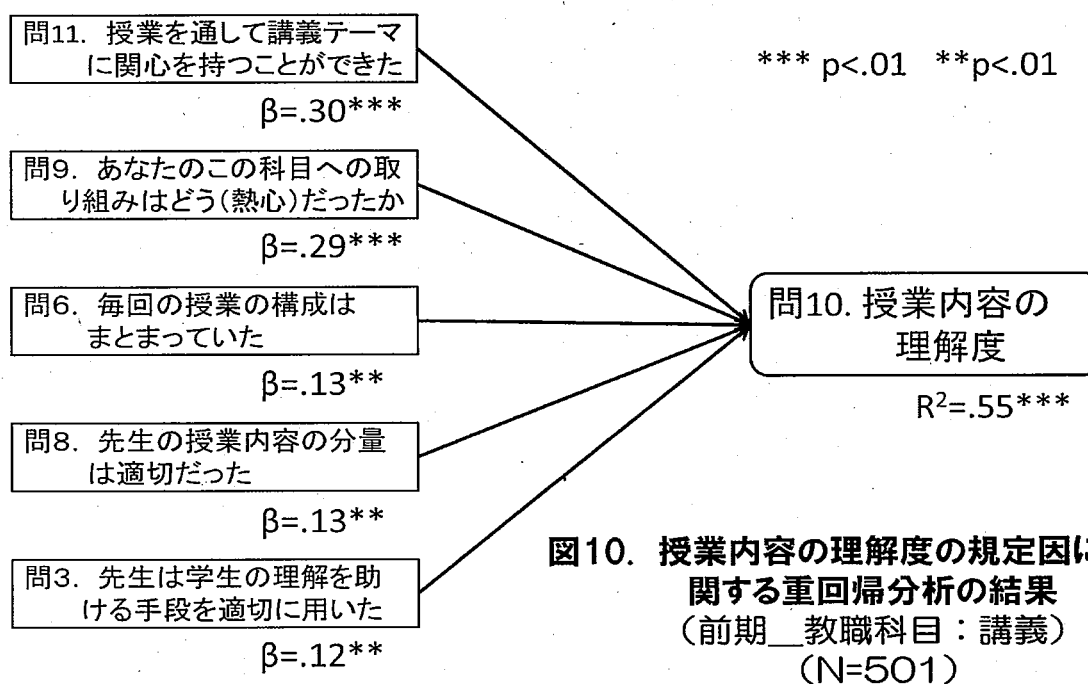


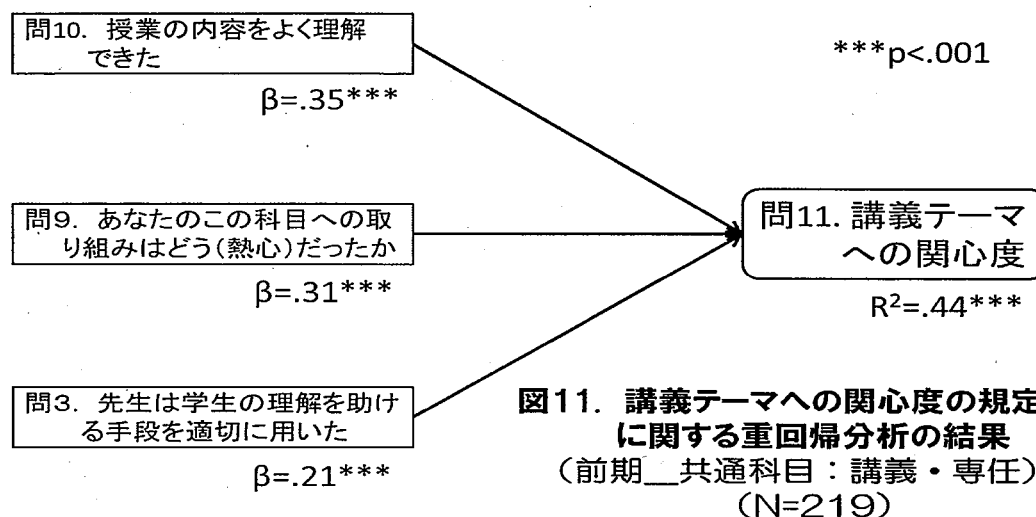
図10は、教職科目の講義を対象に同様の分析を行った結果である。これより、教職科目の講義では、授業を通して講義テーマに関心を持つことができ、学生自身の授業への取り組みが熱心で、教員による授業内容の構成・分量・理解を促す補助手段の活用が適切であるほど、授業内容の理解度が高まることが示唆される。



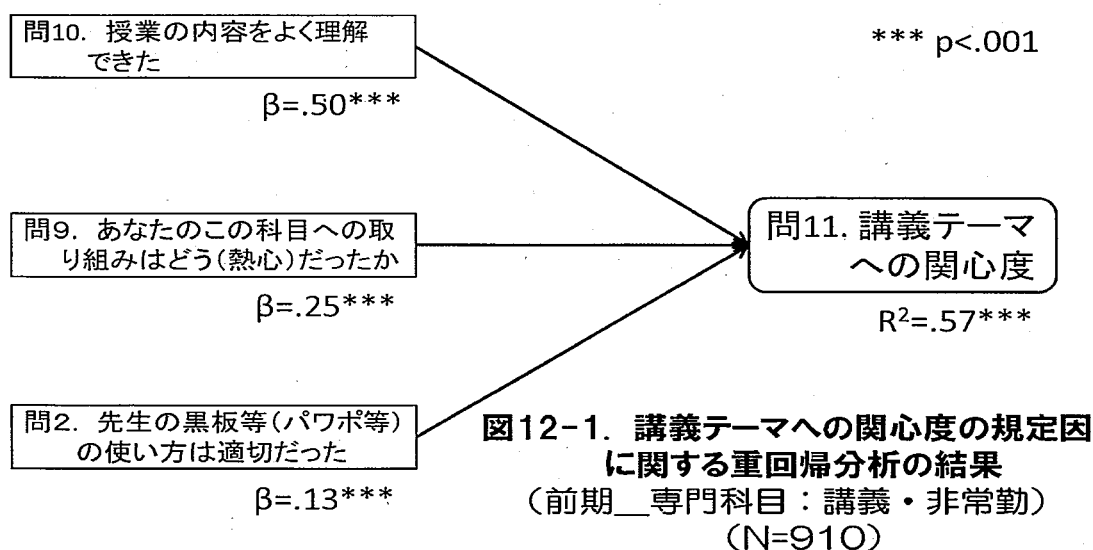
2-3. 授業を通した講義テーマへの関心度を規定する要因の分析

項目 11「授業を通して講義のテーマに関心を持つことができましたか」を“(授業を通した)講義テーマへの関心度”と称し、これを従属変数として上述してきたものと同様の重回帰分析を行った。その結果を順に紹介する。

図 11 は、専任教員が担当する「共通科目の講義」のデータを解析した結果である。これより、共通科目の講義では、授業の内容をよく理解でき、学生自身の授業への取り組みが熱心で、教員が学生の理解を促す補助手段を適切に用いるほど、授業を通して講義テーマへの関心度が高まると言える。



次に、「専門科目の講義」を非常勤と専任に分けて分析した結果を、それぞれ図 12-1 と 12-2 に示す。まず図 12-1 より、非常勤教員が担当する専門科目の講義では、授業内容がよく理解でき、学生自身の授業への取り組み方が熱心で、教員による板書の仕方が適切であるほど、講義テーマへの関心度が高まることが示された。



続いて、図 12-2 の専任教員が担当する専門科目の講義では、授業内容がよく理解でき、学生自身の授業への取り組みが熱心で、教員による授業内容の構成・分量・発言や質問の機会の設定と対応が適切であるほど、講義テーマへの関心度が高まることを示す。非常勤教員の結果と比べ、教員が学生に合わせて授業の構成を工夫することが学生の関心度を高める上で重要なようである。

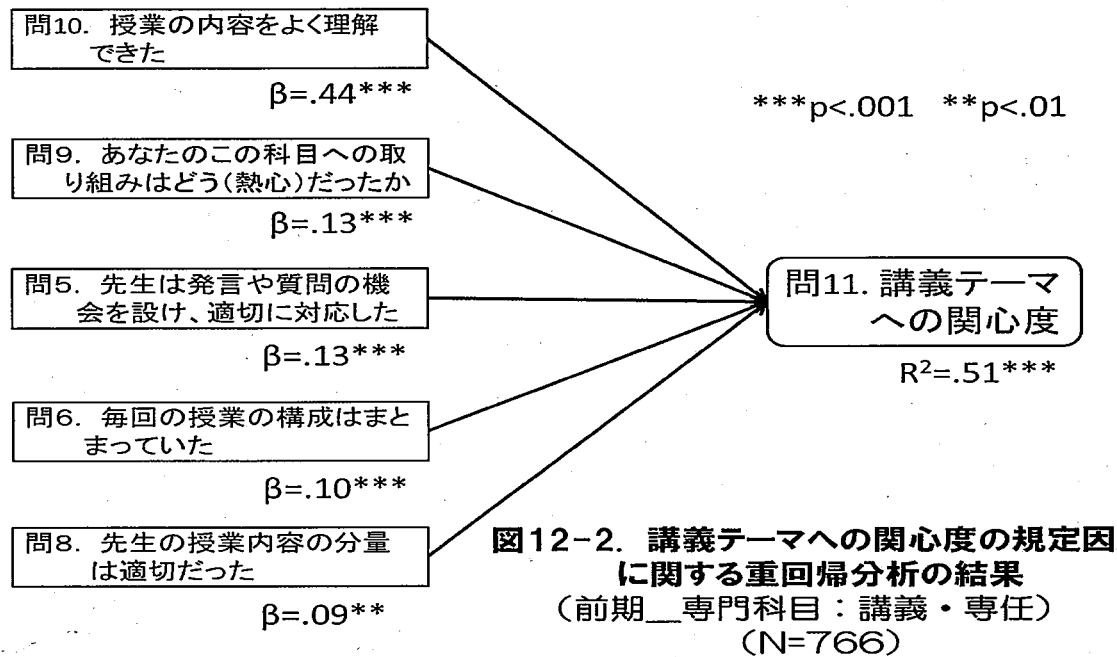
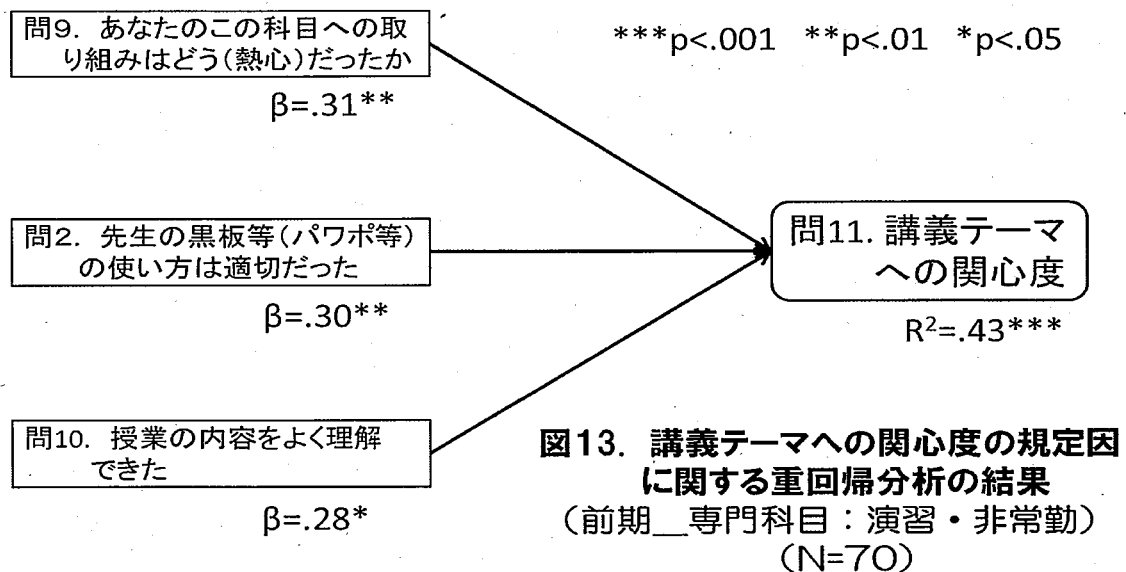


図 13 は、非常勤教員が担当する専門科目演習の結果である。これより、専門科目の演習では、教員による黒板やパワポ等の使い方が適切で、学生自身が授業に熱心に取り組む、授業内容がよく理解できるほど、講義テーマへの関心度が高まることを示唆される。



以下の図 14 は、非常勤教員が担当する資格科目の講義の結果である。これより、資格科目の講義では、授業の内容がよく理解でき、教員が学生の理解を促す補助手段を適切に用いているほど、授業を通して講義テーマへの関心度がより高まると言える。

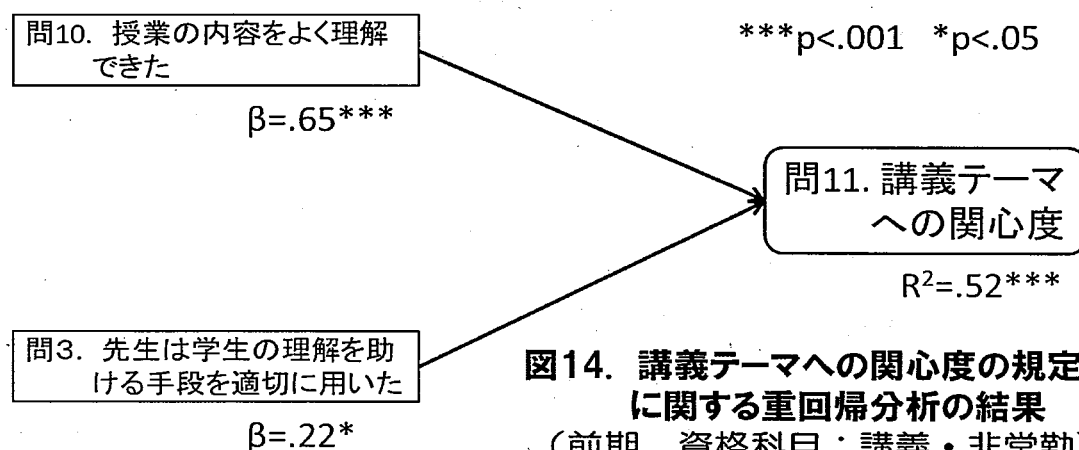


図14. 講義テーマへの関心度の規定因に関する重回帰分析の結果
(前期__資格科目：講義・非常勤)
(N=57)

図 15 は、専任教員が担当する教職科目の講義を対象に分析した結果である。これより、教職科目の講義では、教員による授業内容の分量・板書の仕方・発言や質問の機会の設定と対応が適切で、授業の内容がよく理解でき、学生自身が授業に熱心に取り組み、授業中の私語・携帯電話等の迷惑行為がない良好な学習環境が保たれていると、講義テーマへの関心度が高まると言える。

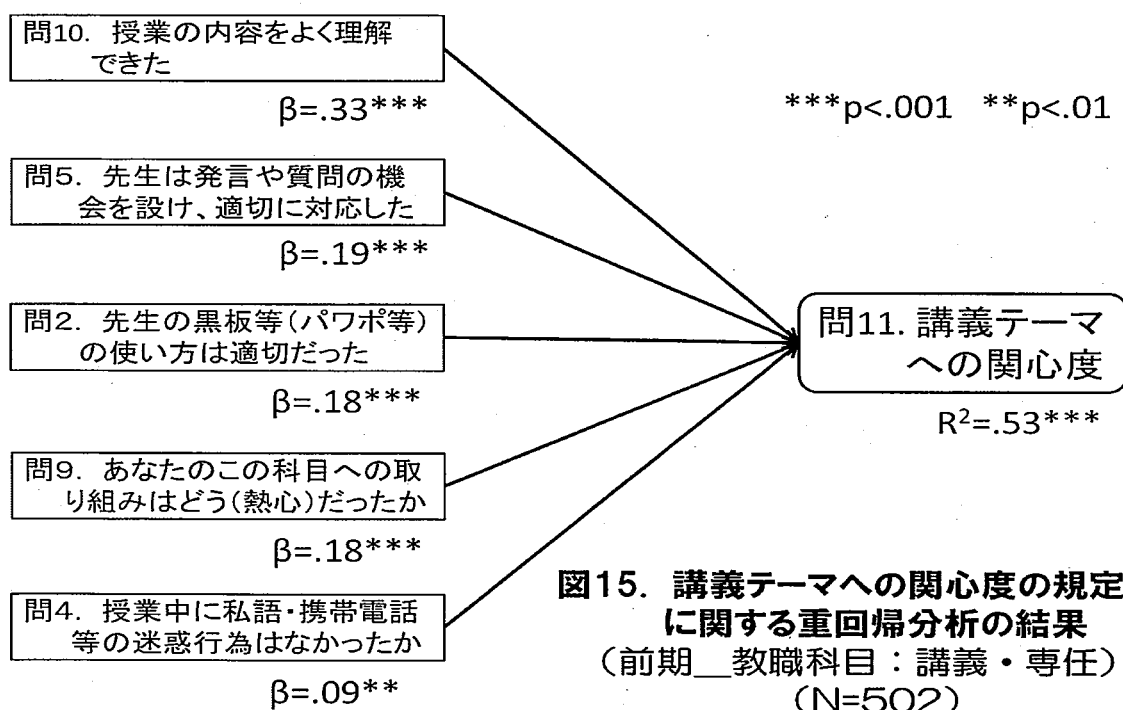


図15. 講義テーマへの関心度の規定因に関する重回帰分析の結果
(前期__教職科目：講義・専任)
(N=502)

3. 後期アンケート（新版）における授業評価の結果

3-1. 授業についての総合評価を規定する要因の分析

項目 25「総合的にみて、この授業を受けて良かったと思う」を“授業についての総合評価”と称してこれを従属変数とした。説明変数群としては、項目 26「総合的にみて、この授業は自分にとって役に立った」と項目 27「オプション」を除く全ての授業評価項目を説明変数群に用いた重回帰分析（ステップワイズ法、以下全て同じ）を行った。その結果を順に紹介していく。

以下の図 16 は、専任教員が担当する共通科目の講義のデータを用いた解析結果である。これより、共通科目の講義では、教員による授業の進め方が適切（授業の構成のまとまり、補助手段の活用、授業のペース）で、学問の面白さを感じることができ、授業内容について自分なりに調べてみようと思うようになった場合、授業の総合評価は高くなることを示している。

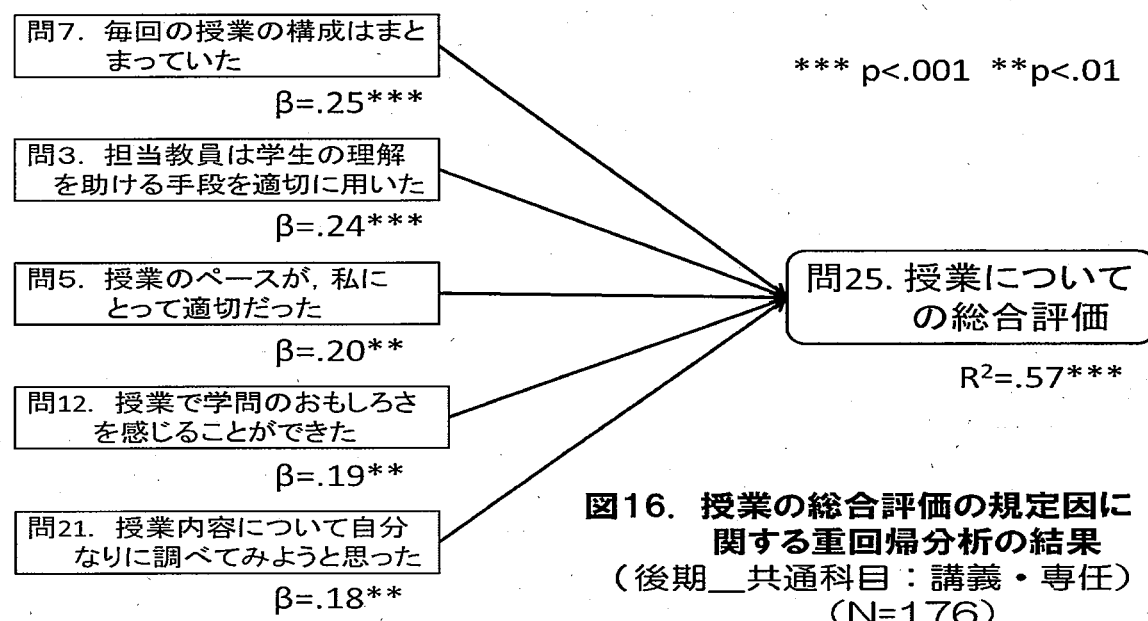
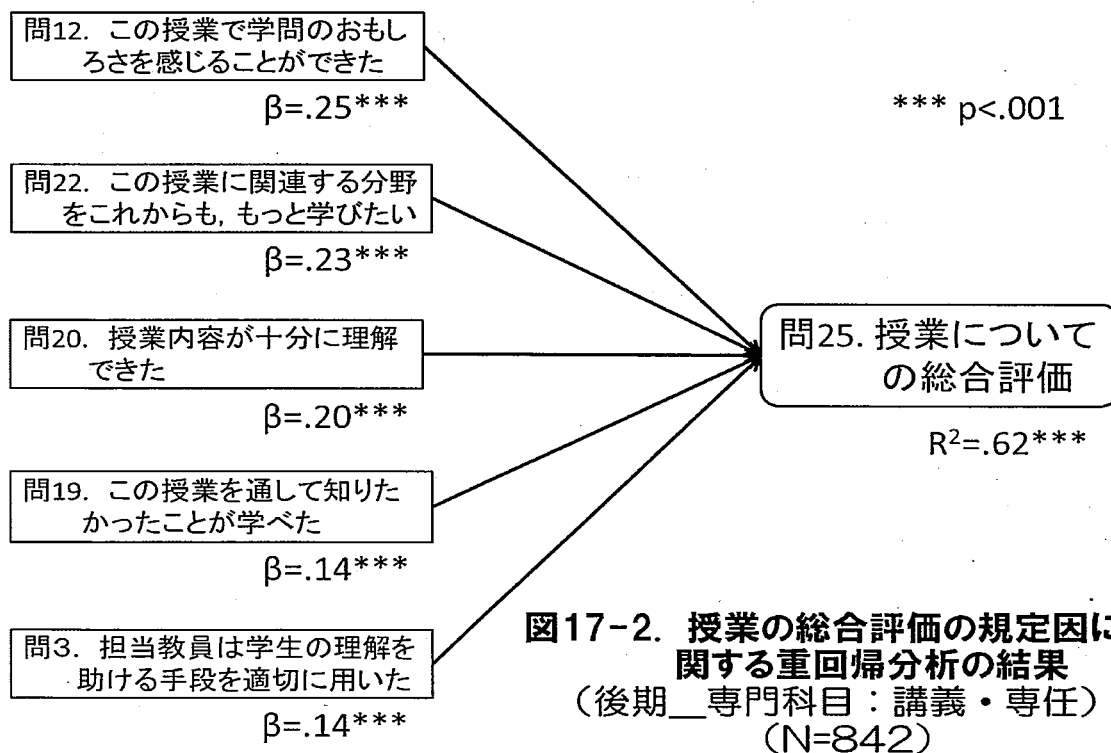
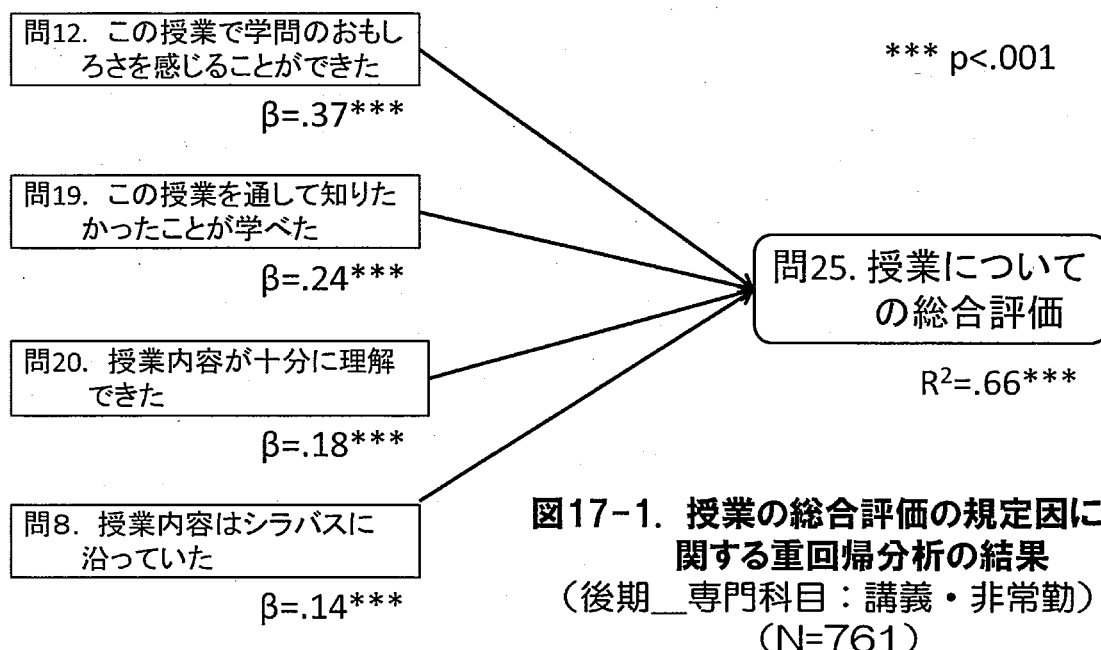


図16. 授業の総合評価の規定因に関する重回帰分析の結果
(後期__共通科目：講義・専任)
(N=176)

次に、「専門科目の講義」を非常勤と専任に分けて分析した結果を、それぞれ図 17-1 と 17-2 に示す。まず図 17-1 より、非常勤教員が担当する専門科目の講義では、授業で学問の面白さを感じることができ、授業を通して知りたかったことが学べ、授業がシラバスに沿って行われ、内容が十分に理解できた場合に、授業の総合評価が高まることが示された。

続いて、図 17-2 より、専任教員が担当する専門科目の講義では、教員が学生の理解を促す補助手段を適切に用い、学生が授業内容を十分に理解できて、知りたかったことが学べること、それから授業で学問の面白さを感じられたり、関連分野をもっと学びたいという意欲が芽生えた場合に、授業の総合評価が高まることが示された。

まとめると、専門科目では非常勤か専任かによらず、学生が当該科目に期待するニーズにマッチした授業内容を分かりやすく提供することに加え、学問の面白さや関連分野をもっと学びたいという知的好奇心を抱かせるような授業が高く評価されると言えよう。



次の図 18 は、専門科目の演習に関する重回帰分析の結果である。これより、専門科目の演習では、授業内容が十分に理解できることが、授業の総合評価を高めることにつながると言える。

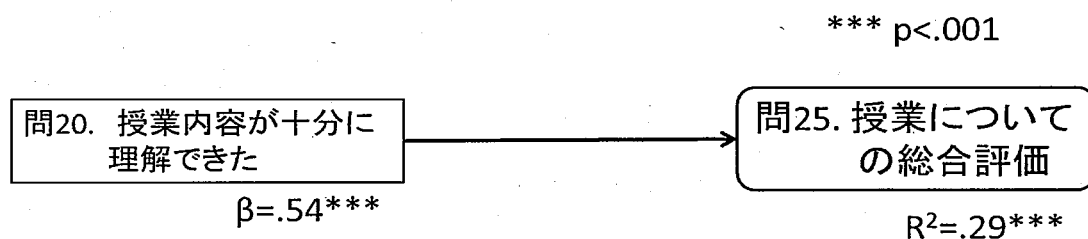


図18. 授業の総合評価の規定因に関する重回帰分析の結果
 (後期__専門科目：演習・非常勤)
 (N=44)

以下の図 19 は、専任教員が担当する教職科目の講義を対象に分析した結果である。これより、教職科目の講義では、授業を通して学問の面白さを感じることができ、関連分野をもっと学びたいという知的な好奇心が刺激され、学生の授業への出席状況も良好であるほど、授業の総合評価が高いということが読み取れる。

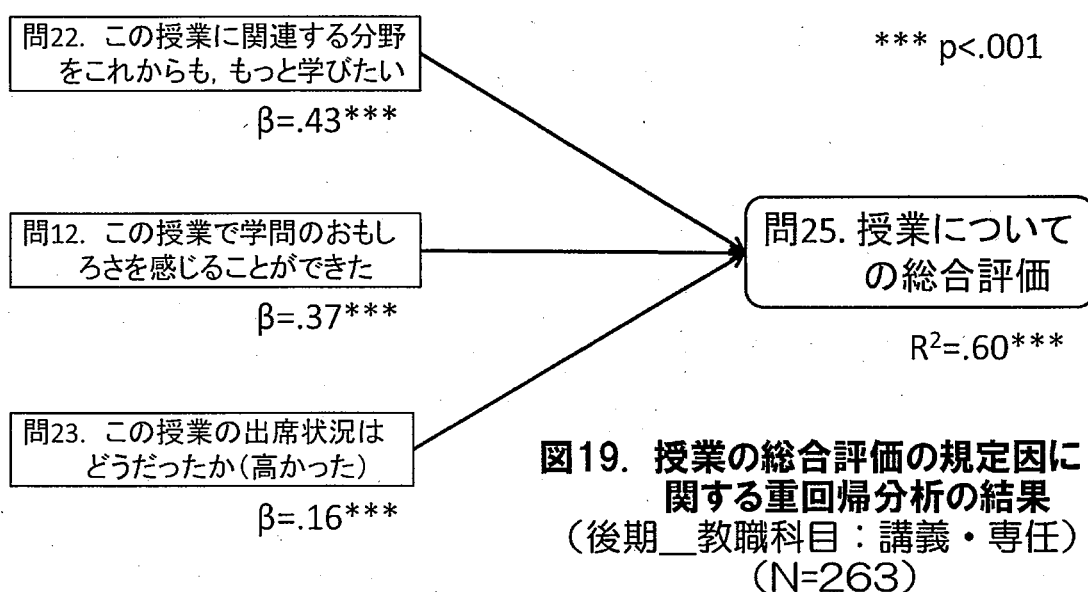
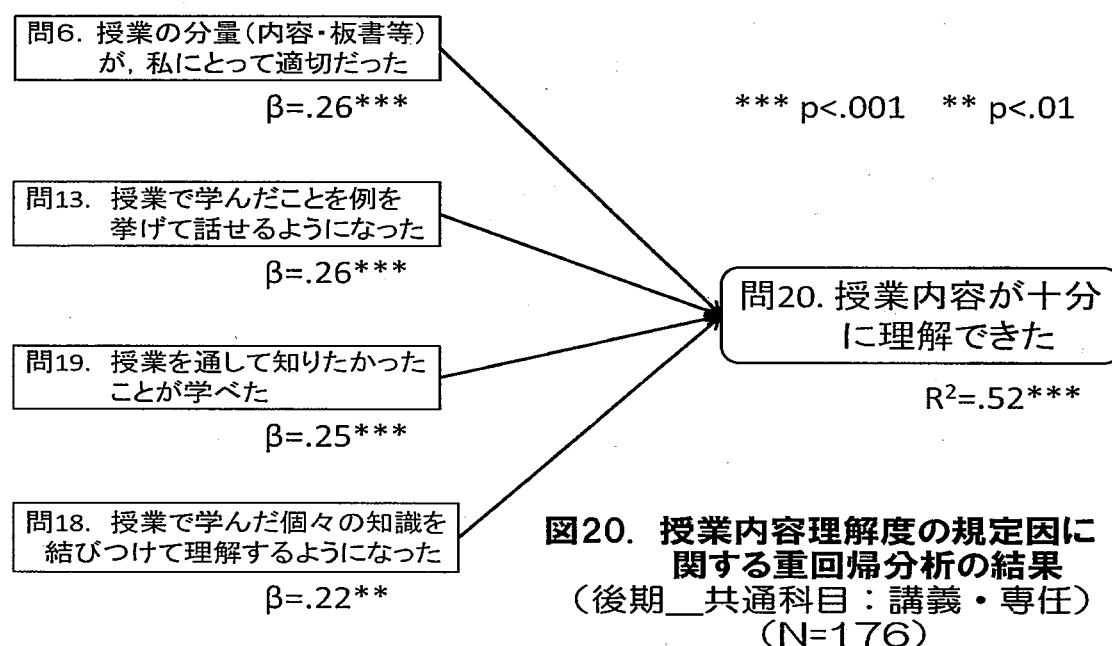


図19. 授業の総合評価の規定因に関する重回帰分析の結果
 (後期__教職科目：講義・専任)
 (N=263)

3-2. 授業内容の理解度を規定する要因の分析

項目 20「授業内容が十分に理解できた」を“授業内容の理解度”と称し、これを従属変数として「総合評価」の場合と同様の重回帰分析を行った。その結果を順に紹介していく。

図 20 は、専任教員が担当する共通科目の講義を対象に分析した結果である。これより、授業の分量が適切で、学生の知りたかったことが授業を通して学べ、さらに、学んだ知識同士を結びつけて理解したり、例を挙げて話せるようになったりした場合に、授業内容が十分に理解できたという認識につながっているようである。



次に、専門科目の講義を非常勤と専任に分けて分析した結果を、それぞれ図 21-1 と 21-2 に示す。まず図 21-1 より、教員が黒板やパワポ等を適切に使用しながら、学生の知りたかったことや学問の面白さを授業で実感させること、そして学生自身が授業で学んだ個々の知識を結びつけて理解するようになったり、例を挙げて話せるようになったり、さらには自分なりに調べてみようと思うようになる授業は、学生の授業内容理解度が高まると言える。

一方、図 21-2 に示す専任教員の結果でも、学生のペースにあった授業を行う中で学生の知りたかったことや学問の面白さを実感させること、そして、学生自身が授業内容を自分なりにノートにまとめながら学んだ個々の知識を結びつけて理解するようになったり、例を挙げて話せるようになったり、さらには自分なりに調べてみようと思うようになる授業ほど、学生の授業内容理解度が高いと言える。

これより、非常勤か専任かによらず専門科目の講義では、次の 3 点が重要な要素と考えられる。1 つは、授業を通して学生が知りたがっていることに応えるような内容を提供し学問の面白さを実感させること、2 つめは、授業で学んだ知識同士を有機的に結びつけて理解させるような働きかけ、そして 3 つめは、自分なりに調べてみようと思わせるような知的探求心の刺激である。これらを学生のレベルをふまえて提供することが授業内容の理解を深めるものと考えられる。

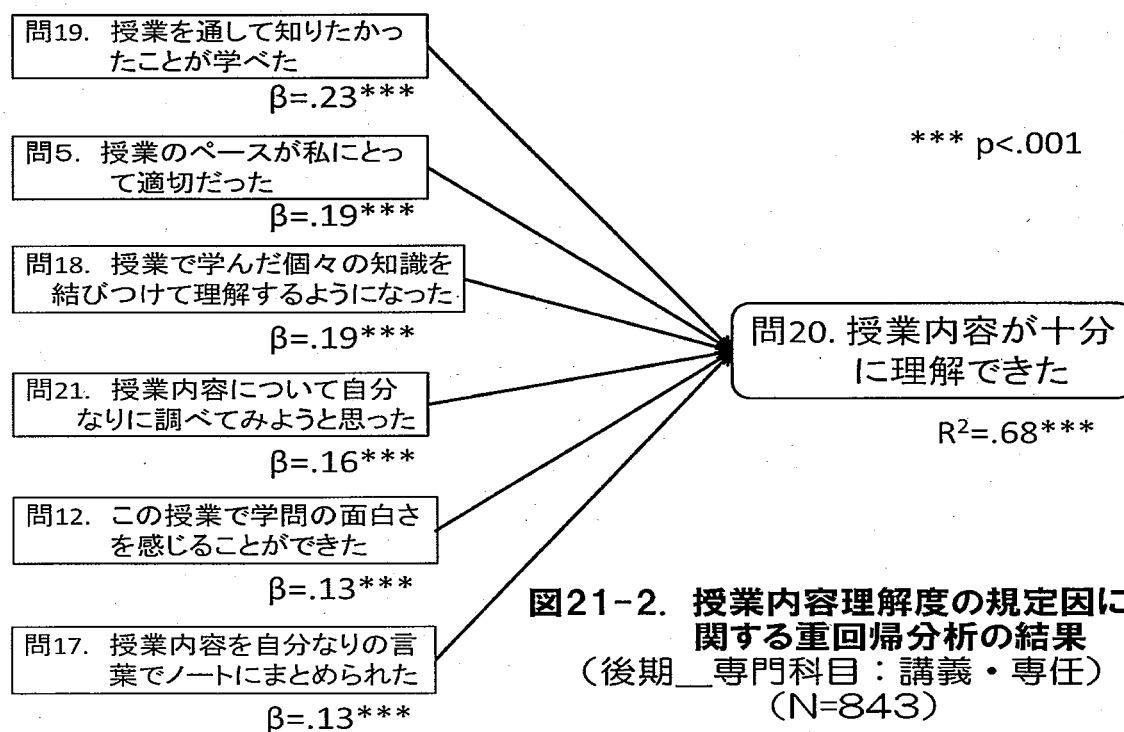
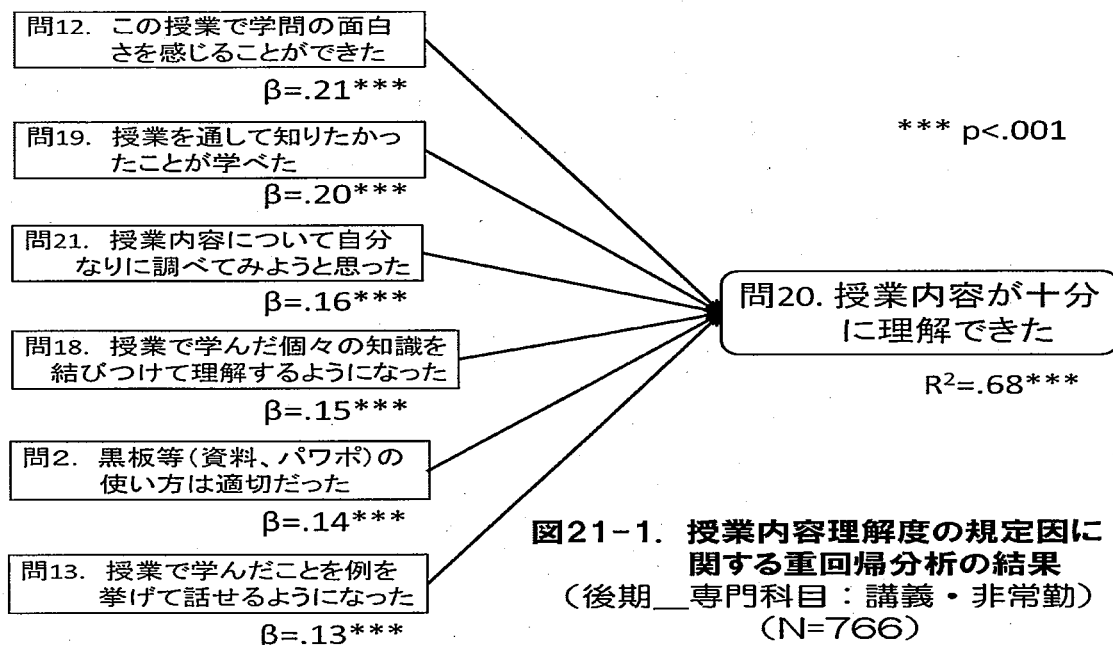


図22は、非常勤教員が担当する専門科目演習の結果である。これより、専門科目の演習では、授業を通して知りたかったことが学べたこと、授業で学んだことを身近な出来事に結びつけて理解するようになったことが、授業内容の理解を促進することにつながるようである。講義で見聞する概念や理論などを演習授業の中で実践的に応用したり、日常生活場面に適用して理解していくような仕掛けが、授業内容をより深く実感を持って理解することにつながるのかもしれない。

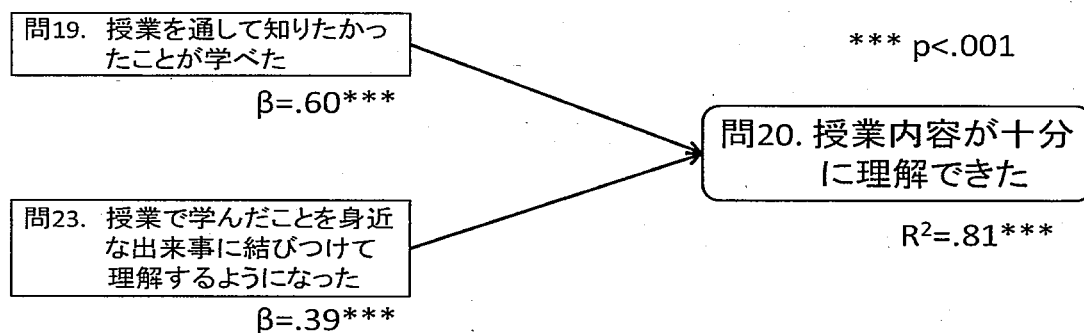


図22. 授業内容理解度の規定因に関する重回帰分析の結果
(後期__専門科目：演習・非常勤)
(N=44)

以下の図 23 は、専任教員が担当する教職科目の講義を対象に分析した結果である。これより、教職科目の講義では、学生にとって適切な分量の授業内容を前回の振り返り等の工夫も交えながら提供し、学生が知りたかったことに応えるだけでなく、自分なりに調べてみようと思わせるような授業は、授業内容をより深く理解することにつながるようである。

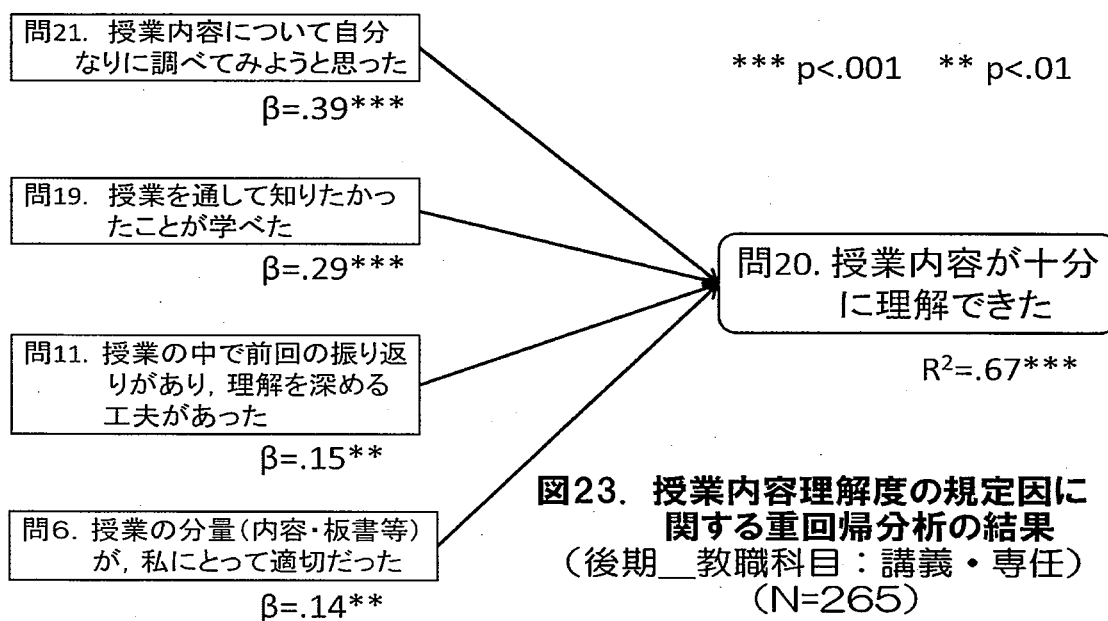


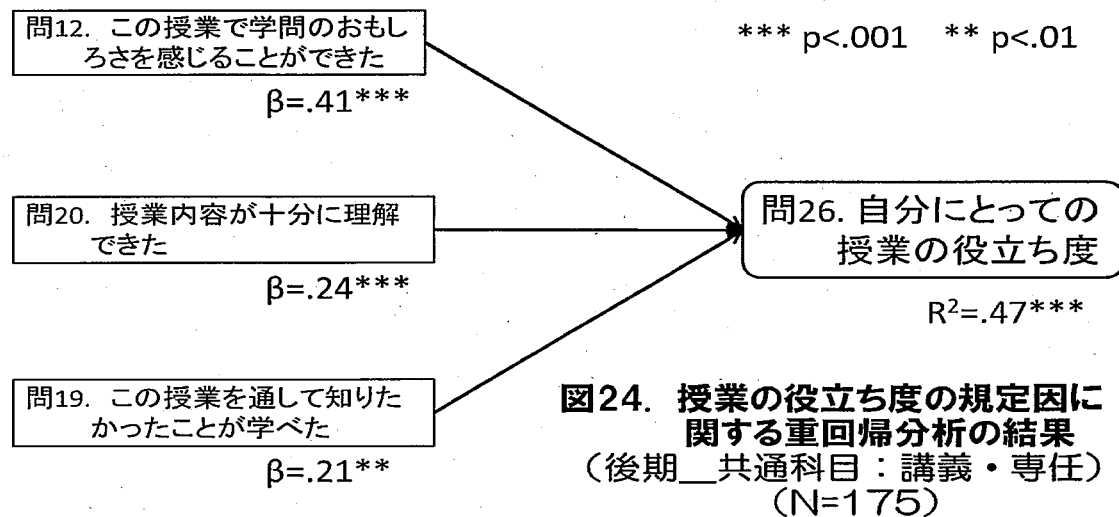
図23. 授業内容理解度の規定因に関する重回帰分析の結果
(後期__教職科目：講義・専任)
(N=265)

3-3. 自分にとっての授業の役立ち度を規定する要因の分析

項目 26「総合的にみて、この授業は自分にとって役に立った」を“自分にとっての授業の役立ち度”と称し、これを従属変数として重回帰分析を行った。その結果を順に紹介していく。

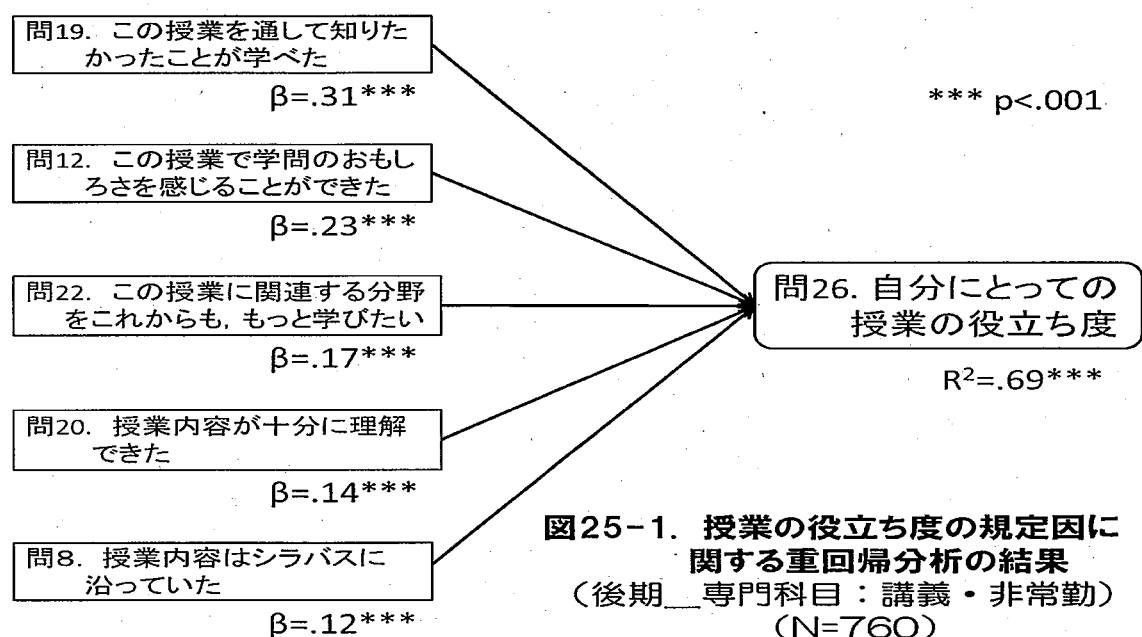
図 24 は専任教員が担当する共通科目の講義を対象に分析した結果である。これより、学生自身の知りたかったことが授業を通して学べ、学問の面白さが実感でき、授業内容が十分に理解

できたと感じているほど、授業が自分の役に立ったという認識につながっているようである。



次に、専門科目の講義を非常勤と専任に分けて分析した結果を、図 25-1 と 25-2 に示す。図 25-1 より、シラバスに沿った授業内容が学生自身の知りたかったことに応えていたり、学問の面白さを実感させるようなものであり、なおかつ、内容が十分に理解でき、もっと関連分野を学びたいと思わせるようなものであるほど、授業が自分の役に立ったという認識をもたらしようである。

一方、図 25-2 の専任教員の結果でも、授業内容が学生自身の知りたかったことに応えていたり、学問の面白さを実感させたり、関連分野をもっと学びたいと思わせるようなものであるほど自分の役に立ったと思わせるようである。それらに加え、教員が理解を促す補助手段を適切に用いながら、授業で学んだことが生活場面に役立つことを実感させるような内容であることも、自分の役に立ったという感覚を強めると言える。



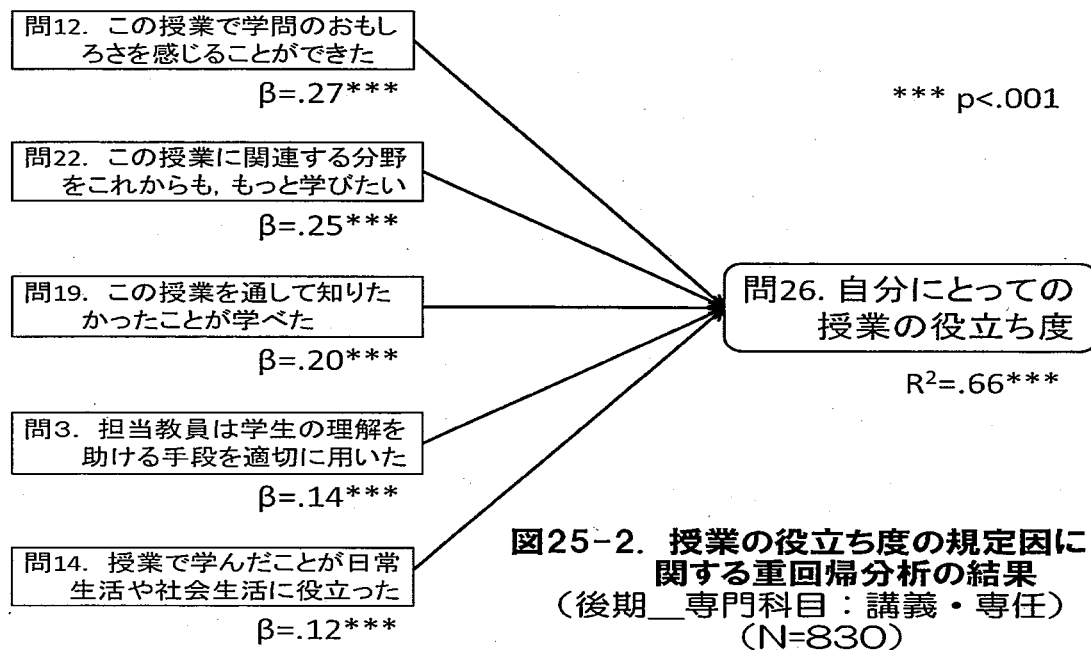


図26は、非常勤教員が担当する専門科目の演習に関する分析結果である。これより、専門科目の演習では、授業で学問の面白さを実感できることが、授業が自分にとって役立ったという認識をもたらすようである。

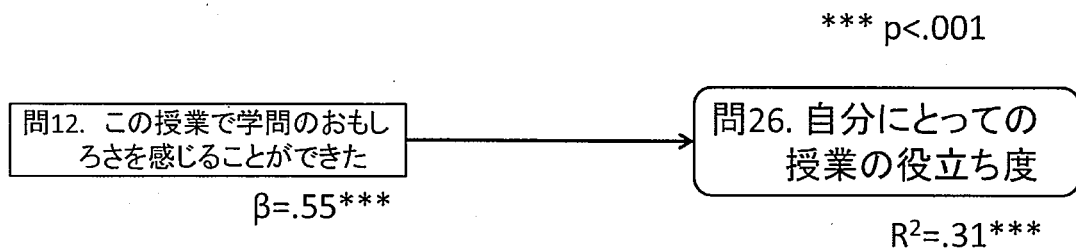


図26. 授業の役立ち度の規定因に関する重回帰分析の結果
(後期__専門科目：演習・非常勤)
(N=44)

以下の図27は、専任教員が担当する教職科目の講義を対象に分析した結果である。これより、教職科目の講義では、授業を通して学問の面白さが感じられ、授業内容が十分に理解でき、関連分野をもっと学びたいと思える場合に、授業が自分にとって役だったという感覚を抱かせると言える。これらに加え、教員による黒板やパワポ等の使い方が適切で、学生自身の出席状況が良好である講義は、授業が自分の役に立ったと感じさせるものであることを物語っている。

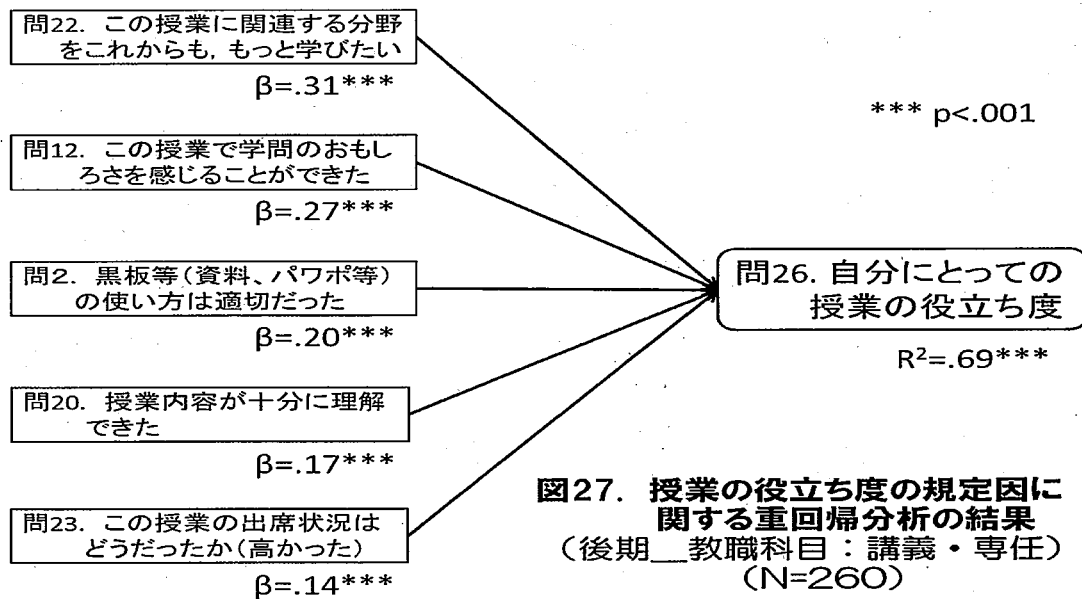


図27. 授業の役立ち度の規定因に関する重回帰分析の結果
(後期__教職科目：講義・専任)
(N=260)

3-4. 授業後の学習意欲を規定する要因の分析

項目 22「この授業に関連する分野をこれからも、もっと学びたい」を“授業後の学習意欲”と称し、これを従属変数として重回帰分析を行った。その結果を順に紹介していく。

図 28 は専任教員が担当する共通科目の講義を対象に分析した結果である。これより、毎回の授業の構成がよくまとまっていて、学生自身の知りたかったことが授業から学べ、授業を受けて良かったと実感させたり、自分なりに調べてみようと思わせるような授業内容であるほど、授業後の学習意欲を引き出すことが示唆される。

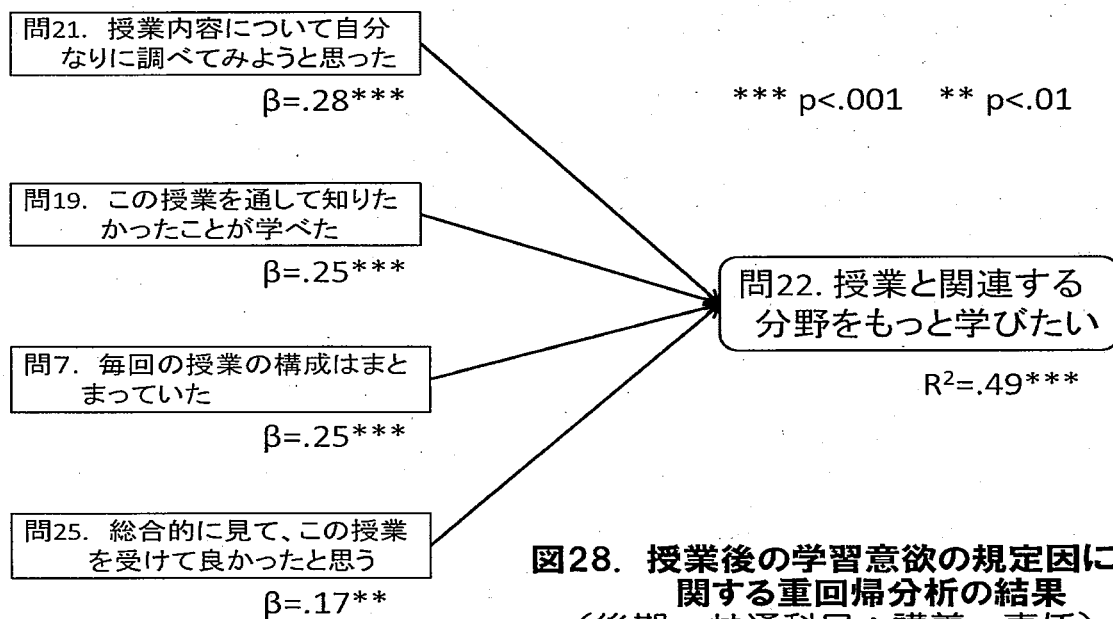


図28. 授業後の学習意欲の規定因に関する重回帰分析の結果
(後期__共通科目：講義・専任)
(N=175)

次に、専門科目の講義を非常勤と専任に分けて分析した結果を、図 29-1 と 29-2 に示す。図 29-1 より、授業を通して学問の面白さを実感できたり、授業を受けて良かったとか自分の役に立ったと感じさせるものほど、授業と関連する分野をこれからももっと学びたいという学習意欲を引き出すと言える。また、学生の出席状況の良好さは関連分野をもっと学びたいという意欲につながっているようである。

一方、図 29-2 の専任教員の結果でも、授業を通して学生が知りたかったことが学べたり、学問の面白さが実感できたり、授業が自分の役に立ったとか自分なりに調べてみようと思わせるようなものであるほど、関連分野をこれからもっと学びたいという学習意欲を高めるようである。

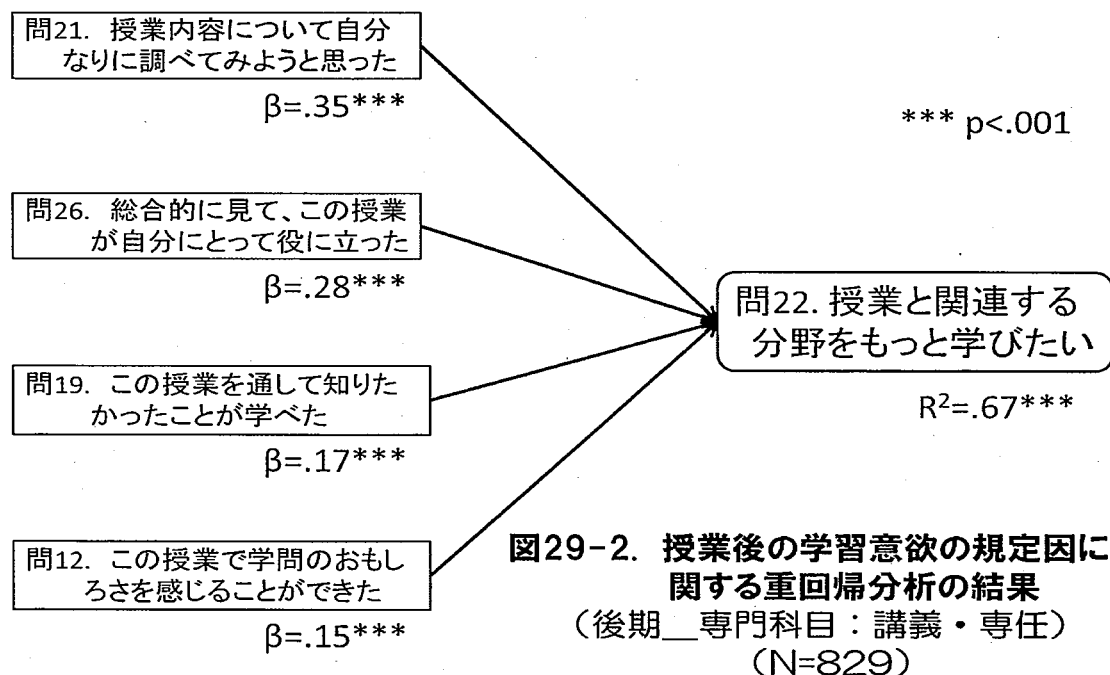
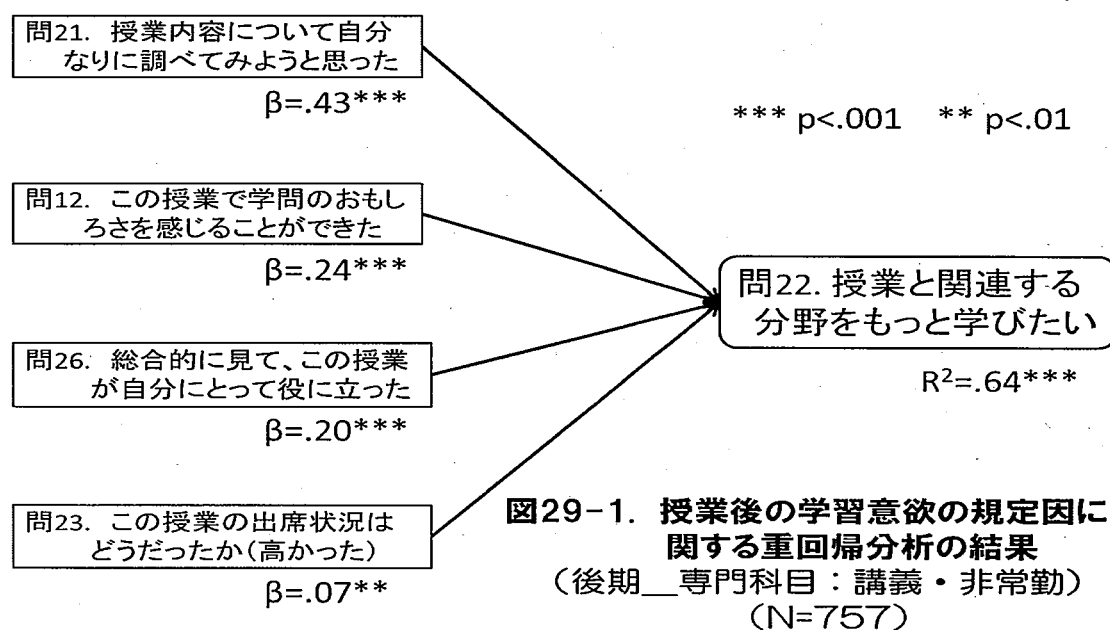


図 30 は、非常勤教員が担当する専門科目の演習に関する分析結果である。これより、専門科目の演習では、授業内容が十分に理解できるということが、授業と関連する分野をこれからも、もっと学びたいという意欲につながることを示唆される。

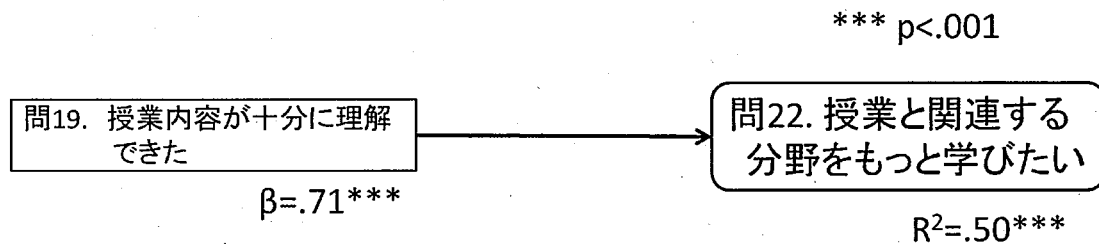


図30. 授業後の学習意欲の規定因に関する重回帰分析の結果
(後期__専門科目：演習・非常勤)
(N=44)

以下の図 31 は、専任教員が担当する教職科目の講義を対象に分析した結果である。これより、教職科目の講義では、この授業を受けて良かったと実感できること、授業内容について自分なりに調べてみようと思えること、授業で学んだことを身近な出来事に結びつけて考えられること、これら 3 要素が授業後の学習意欲を喚起する上で重要なようである。

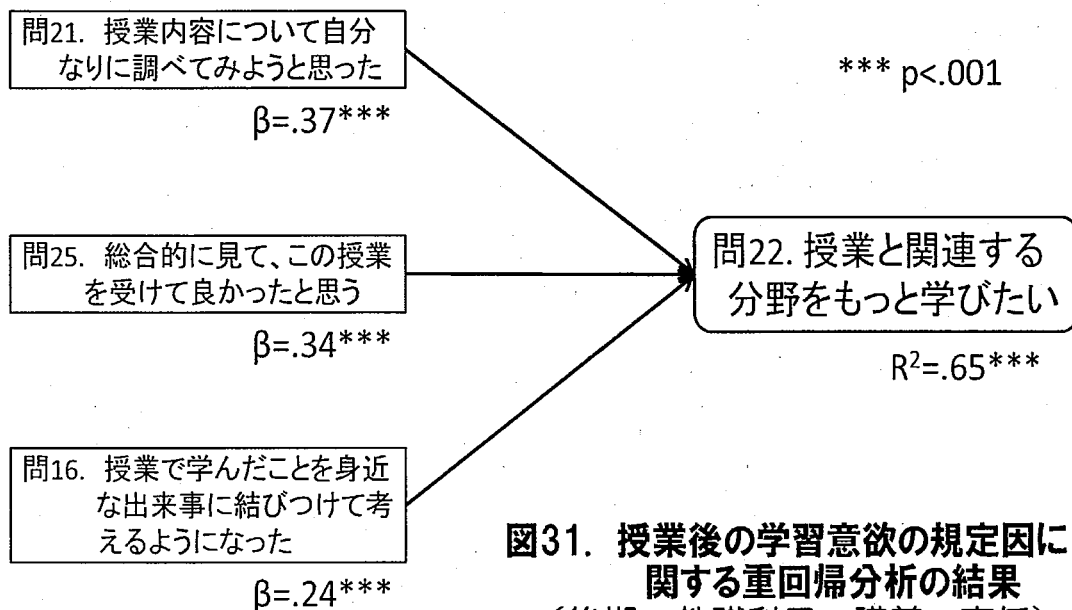


図31. 授業後の学習意欲の規定因に関する重回帰分析の結果
(後期__教職科目：講義・専任)
(N=259)

4. 前期（旧版）アンケート結果のまとめ

4-1. 授業についての総合評価を規定する要因

共通科目と専門科目の講義で一貫して影響力を持つ要因は、項目 11「授業を通して講義テーマに関心を持つことができた」、項目 10「授業内容をよく理解できた」、項目 3「先生が学生の理解を促す補助手段を適切に用いた」の 3 つである。一方、専門演習科目では、項目 6「授業の構成のまとまり」に加え、学生自身の取り組みの熱心さも重要な要素と言える。さらに、資格科目や教職科目では、項目 10「授業内容がよく理解できた」と、教員の授業の進め方に関わる項目 4「私語・携帯電話等の迷惑行為」や項目 5「発言や質問の機会の設定と対応」への適切さが重要な要素と考えられているようである。

4-2. 授業内容の理解度を規定する要因

科目種別（共通・専門・資格・教職：科目）や教員区分（非常勤・専任：教員）、講義形態（講義・演習）によらず、授業内容の理解度を一貫して規定する要因は、項目 11「授業を通して講義テーマに関心を持つことができた」と項目 9「あなたのこの科目への取り組みはどう（熱心）だったか」であった。すなわち、教員が学生の関心を引き起こすような授業内容を提供し、学生の熱心な取り組みを引き出すという双方向性が、授業内容をより深く理解させることにつながると考えられる。その手段として、教員が授業内容の分量や構成、黒板等の使い方を工夫したり、発言や質問の機会を設けて学生の関与を促すような仕掛けが重要だと考えられる。

4-3. 講義テーマへの関心度を規定する要因

科目種別（共通・専門・資格・教職：科目）や教員区分（非常勤・専任：教員）、講義形態（講義・演習）によらず、講義テーマへの関心度をほぼ一貫して規定する要因は、項目 10「授業内容をよく理解できた」と項目 9「あなたのこの科目への取り組みはどう（熱心）だったか」であった。学生にとって、授業内容がよく理解でき、熱心に取り組めるような科目は、講義テーマへの関心度をより強めると言えるだろう。そのためには、項目 3「先生が学生の理解を促す補助手段を適切に用いた」り、項目 2「先生の黒板やパワポ等の使い方は適切だった」が必要だと考えられる。

5. 後期（新版）アンケート結果のまとめ

5-1. 授業についての総合評価を規定する要因

科目種別（共通・専門・資格・教職：科目）や教員区分（非常勤・専任：教員）、講義形態（講義・演習）によらず、講義テーマへの関心度をほぼ一貫して規定する要因は、項目 12「この授業で学問のおもしろさを感じることができた」であった。個別にみていくと、共通科目では学生の理解を支援するような教員の授業の進め方（授業内容の構成・ペース・補助手段の活用）が重要で、専門科目では、項目 19「授業を通して知りたかったことが学べた」と項目 20「授業内容が十分に理解できた」が重要なようである。

5-2. 授業内容の理解度を規定する要因

授業内容の理解度に対して共通科目と専門科目の講義で一貫して影響力を持つ要因は、項目 19「授業を通して知りたかったことが学べた」と項目 18「授業で学んだ個々の知識を結びつけて理解するようになった」であった。特に、前者の項目 19 は、科目種別・教員区分・講義形態によらず全てに共通して寄与する要因であった。このことは、学生たちが当該科目に何を期待しているか、どのような話題を取り上げてほしいと思っているか、そのニーズを把握することが「わかる」授業を提供する上では重要であることを示唆しているのではないだろうか。

また、項目 13「授業で学んだことを例を挙げて話せるようになった」や項目 21「授業内容について自分なりに調べてみようと思った」に見られるように、授業に起因する学生の学びの変化が理解に寄与する一因であることには注目すべきであろう。これらの項目は前期アンケートでは測定されていないこともあり、学生の学びのプロセスと授業理解度の関係を知る上で重要だと考えられる。

5-3. 自分にとっての授業の役立ち度を規定する要因

自分にとっての授業の役立ち度に関して共通科目と専門科目の講義で一貫して影響力を持つ要因は、項目 19「授業を通して知りたかったことが学べた」と項目 12「この授業で学問のおもしろさを感じることができた」であった。すなわち、授業内容が“知りたかったこと”や“面白いと感じられること”が、学生たち自身にとって役に立ったかどうかの認識を規定していると言える。また、全体的に見て、教員による授業内容や方法のあり方（配布資料・授業のペース・授業の分量・授業の構成）は、学生にとっての役立ち度には影響しておらず、唯一、非常勤教員が担当する専門科目講義において項目 8「授業内容はシラバスに沿っていた」がわずかに寄与しているのみであった。ここから、学生にとって役立つ授業であるかどうかを規定するのは教員側の授業のやり方よりも学生側の欲求や感情の充足にあると考えられる。

5-4. 授業後の学習意欲を規定する要因

授業後の学習意欲に対しては科目種別や教員区分を問わず、項目 21「授業内容について自分なりに調べてみようと思った」が一貫して影響していた。授業で全ての解答を示すのではなく、未解決課題を提示したり、問いを投げかけたり、新たな疑問を抱かせるような発想を刺激する等して、学生が授業外でも学ぶようなシーズを提供する役割が授業には求められよう。

6. 総合的な考察

前期アンケートと後期アンケートの授業評価結果について、以下では総合的に考察する。

まず、「授業についての総合評価」を規定する要因は大きく2つあると言える。1つは、前期・後期共に教員が学生の個人差に配慮した教育内容や方法（授業内容の構成・分量・ペース・板書や資料・補助手段の活用）を提供できるかどうかで、2つめは、学生に授業への関心やおもしろさを抱かせることができるかどうか、である。

次に、「授業内容の理解度」を規定する要因に言及する。前期・後期に共通するのは、学生のニーズに合致する（“講義テーマへの関心”，“知りたかったことが学べた”）授業内容の提供が授業内容の理解度を左右するということである。逆に言えば、学生たちのニーズには合致しないかもしれないが基礎的で重要だと考えられる学習内容を、いかに工夫して学習させるか、あるいは必要性を認識させるかが重要な課題だと考えられる。面白い・役に立つ・興味が持てるといった学生側のニーズに応える「わかる」授業も重要であるが、一方で、すぐにはそのおもしろさや役立ち度が実感しにくい「わかりにくい」授業も大学教育には必要だと考えられる。いわゆる「学士力」や「社会人基礎力」の育成も念頭に置くならば、「おかゆ」や「白米」だけではなく、「玄米」や「雑穀米」のような授業を提供することも重要であろう。

前期アンケートでは、学生側のどのような学習プロセスが授業内容の理解度をあげるのかが明らかにならないが、後期アンケートの結果を見ると、項目18「授業で学んだ個々の知識を結びつけて理解するようになった」や項目13「授業で学んだことを例を挙げて話せるようになった」が理解度に寄与していることが示唆される。教育効果の測定を考える上では、学習者側にどのような学びが生じているかを具体的に把握することが重要だと考えられ、後期アンケートにおけるそれらの測定項目は、一定の役割を果たしていると言えるだろう。

「授業の役立ち度」については、授業内容が“知りたかったこと”や“面白いと感じられること”かどうか、学生たち自身にとっての役立ち度の認識を規定していることが示された。これは見方を変えれば、“知りたかったことではない”，“面白いとは感じられない”ような授業を、学生側はすぐに役立たないという観点で切り捨てたり、ドロップアウトしてしまう可能性を内包している。役に立つか立たないかという実学的な要素は確かに重要な一面であろうが、一方で、そうした実学的な観点をすぐには見いだせないような学習内容が大学教育には多分に含まれているはずである。いかにして学生の関心を惹き付ける授業を行うかという工夫が必要なことは言うまでもないが、実学的な観点を重視するあまり、学生迎合的な教育であってはならないだろう。

最後に、「授業後の学習意欲」については、授業内容について“自分なりに調べてみよう”と思わせることが重要な要素であることが示唆された。授業を通して“解を与える”ことも重要であるが、学生の更なる学びを引き出すためには“問いを与える”ことがより重要であることを物語っている。

総じて言えば、今後の授業改善に向けて、学生のニーズや反応をアセスメントする側面と、学生にシーズを提供する、あるいは教員と一緒に“問い”を共有し、さらに探求し続けることの必要性を意識化させることが大切だと考えられる。

付録1. 2014 年度前期 授業評価アンケート用紙

授業についてのアンケート

授業科目名() 授業担当者()

この科目の授業全体についてあなたの意見を聞かせて下さい。授業の現状を自己点検し、今後の授業内容や方法の改善に役立てるものです。この用紙はマークシート用紙ですのであてはまる番号の○をHBの鉛筆で塗りつぶして下さい。
はじめに、あなたの所属学科の番号を、下の説明にしたがって塗りつぶして下さい。

法律学科は1、地域行政学科は2、(新)経済学科は3、地域環境政策学科は4、企業システム学科は5、産学情報学科は6、日本文化学科は7
英米言語文化学科は8、社会文化学科は9、人間福祉学科は10、法学科は11、(旧)経済学科は12、商学科は13、その他は14

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭

- | 所属部について | 現在の学年について | 性別について |
|--------------------------|--|------------------|
| 1部は1、2部は2、夜間主は3
① ② ③ | 1年は1、2年は2、3年は3、4年以上は4、その他は5
① ② ③ ④ ⑤ | 男性は1、女性は2
① ② |
1. 先生の話はよく聞こえましたか(声の大きさ、マイクの使い方など) ① ② ③ ④
1. 常に明瞭であった 2. やや明瞭であった 3. あまり明瞭でなかった 4. 不明瞭であった
 2. 先生の黒板等(板書代わりのOHP、パワーポイント、ファイルなど含む)の使い方は適切でしたか ① ② ③ ④
1. 適切であった 2. やや適切であった 3. やや不適切であった 4. 不適切であった
 3. 先生は学生の理解を助ける手段(テキスト、プリント、OHP、VTR、インターネットなど)を適切に用いましたか ① ② ③ ④
1. 適切であった 2. やや適切であった 3. やや不適切であった 4. 不適切であった
 4. 授業中に私語・携帯電話使用などの迷惑行為はありませんでしたか ① ② ③ ④
1. ほとんどなかった 2. 少なかった 3. 多かった 4. 非常に多かった
 5. 先生は発言や質問の機会を設け、適切に対応していましたか ① ② ③ ④
1. 充分にされていた 2. ある程度されていた 3. あまりされていなかった 4. 全くされていなかった
 6. 毎回の授業の構成はまとまっていたか ① ② ③ ④
1. 良くまとまっていた 2. ややまとまっていた 3. あまりまとまっていなかった 4. 全くまとまっていなかった
 7. 先生の授業内容はシラバスに沿っていましたか ① ② ③ ④
1. 沿っていた 2. ある程度沿っていた 3. ほとんど沿っていなかった 4. シラバスがなかった(わからない)
 8. 先生の授業内容の分量はどうでしたか ① ② ③ ④
1. 適切であった 2. やや適切であった 3. やや不適切であった 4. 不適切であった
 9. あなたのこの科目への取り組みはどうでしたか(授業時間だけでなく予習・復習を含む) ① ② ③ ④
1. 熱心に取り組んだ 2. 普通に取り組んだ 3. 時々悪かった 4. 悪かった
 10. 授業の内容をよく理解できましたか ① ② ③ ④
1. よく理解できた 2. 理解できた 3. どちらともいえない 4. 全く理解できなかった
 11. この授業を通して講義のテーマに関心を持つことができましたか ① ② ③ ④
1. 大いに持つようになった 2. 持つようになった 3. あまり持てなかった 4. 全く持てなかった
 12. この授業について総合的にどう評価しますか ① ② ③ ④
1. 非常に高く評価できる 2. やや高く評価できる 3. あまり評価できない 4. 全く評価できない

※裏面に自由記述項目がありますので、裏面も見てください。

付録 2. 2014 年度後期 授業評価アンケート用紙 (1 ページ目)

授業についてのアンケート

授業科目名 () 担当教員名 ()

この科目の授業全体とあなた自身の学びについてあなたの意見を聞かせてください。
このアンケートは、授業への意見と受講生の学習状況の2つの視点から授業を自己点検し、今後の授業改善に役立てるものです。
授業を学生・教員の双方にとってよりよい学びの場とするために、ご協力をお願いします。この用紙はマークシート用紙ですので
あてはまる番号の () をHBの鉛筆で塗りつぶしてください。
はじめに、あなたの所属学科の番号を、下の説明にしたがって塗りつぶしてください。

法律学科は①、地域行政学科は②、経済学科は③、地域環境政策学科は④、企業システム学科は⑤、産業情報学科は⑥、
日本文化学科は⑦、英米言語文化学科は⑧、社会文化学科は⑨、
人間福祉学科は⑩、その他は⑪

※ 所属部について(学部生は①、科目等履修生・特別学生・聴講生は②)
現在の学年(1年は①、2年は②、3年は③、4年は④、科目等履修生・聴講生は⑤)
※ 性別について(男性は①、女性は②)

質問項目をよく読んで、この授業についてあなたの考えにあてはまる程度をお答えください。選択肢は「①まったくあてはまらない～⑥とてもあてはまる」の5つです。回答は1つだけ選んで塗りつぶしてください。質問項目の内容がこの授業に関係がない場合は、右端の「⑥」を選んでください(例:レジュメの配布がない授業の場合→項目4→回答は⑥)。

	① まったく あてはま らない	② やや あては まらな い	③ どちら も	④ やや あては まる	⑤ とても あては まる	⑥ この授業に 関係が ない
【授業全体について感じたこと】						
1. 担当教員の話はよく聞こえた(声の大きさ、マイクの使い方など)	0	0	0	0	0	0
2. 黒板など(板書代わりのOHP、パワーポイント、ファイルなどを含む)の使い方は適切であった	0	0	0	0	0	0
3. 担当教員は学生の理解を助ける手段(テキスト、プリント、OHP、VTR、インターネットなど)を適切に用いていた	0	0	0	0	0	0
4. 配布資料(レジュメなど)が授業内容の理解に役立った	0	0	0	0	0	0
5. 授業のペースが、私にとって適切だった	0	0	0	0	0	0
6. 授業の分量(内容・板書など)が、私にとって適切だった	0	0	0	0	0	0
7. 毎回の授業の構成はまとまっていた	0	0	0	0	0	0
8. 授業内容はシラバスに沿っていた	0	0	0	0	0	0
9. 担当教員は授業中の私語・携帯電話使用などの迷惑行為に、適切に対応していた	0	0	0	0	0	0
10. 担当教員は発言や質問の機会を設け、適切に対応していた	0	0	0	0	0	0
11. 授業の中で前回の内容の振り返りがあり理解を深める工夫があった	0	0	0	0	0	0
12. この授業で字問のおもしろさを感じることができた	0	0	0	0	0	0
【この授業でのあなた自身の学びについて】						
13. 授業で学んだことを自分なりに例をあげて話せるようになった	0	0	0	0	0	0
14. 授業で学んだことが日常生活や社会生活に役立った	0	0	0	0	0	0
15. 授業内容について質問できるようになった	0	0	0	0	0	0

付録2. 2014 年度後期 授業評価アンケート用紙 (2 ページ目)

表面より続き

授業についてのアンケート

	① 全く 関係が ない	② やや 関係が ない	③ 普通	④ やや 関係が ある	⑤ とても 関係が ある	⑥ この授業に 関係が ない
16. 授業で学んだことを身近な出来事に結びつけて考えるようになった	0	0	0	0	0	0
17. 授業内容を自分なりの言葉でノートにまとめられた	0	0	0	0	0	0
18. 授業で学んだ個々の知識を結びつけて理解するようになった	0	0	0	0	0	0
19. この授業を通して知りたかったことが学べた	0	0	0	0	0	0
20. 授業内容が十分に理解できた	0	0	0	0	0	0
21. 授業内容について自分なりに調べてみようと思うようになった	0	0	0	0	0	0
22. この授業に関連する分野をこれからも、もっと学びたい	0	0	0	0	0	0
23. この授業の出席状況(実際に出席した割合)について下記の選択肢から選んでください ①60%以下の出席、②70%程度の出席、③80%程度の出席、 ④90%程度の出席、⑤皆出席	0	0	0	0	0	0
24. この授業における1週間の予習復習の合計時間を次の選択肢から選んでください ①1時間未満、②1時間程度、③2時間程度、④3時間程度、⑤3時間以上	0	0	0	0	0	0
25. 総合的にみて、この授業を受けてよかったと思う	0	0	0	0	0	0
26. 総合的にみて、この授業は自分にとって役に立った	0	0	0	0	0	0
27. オプション(担当教員から設問、選択肢についての指示があります)	0	0	0	0	0	0

28. この授業について、よかった点や印象に残ったことがあれば自由に書いてください

29. この授業について、気になったことや改善して欲しいことなどがあれば自由に書いてください

30. その他、大学全体の教育環境等に何かご意見があれば自由に書いてください

★ ご協力ありがとうございました ★

※ 項目1～27の回答の集計結果は数値や図表にまとめられ、項目28、29の記述内容はデータ化され、担当教員に届けられます。
※ 項目30の記述内容はデータ化され、各学部学科、各窓口へ届けられます。

FD 委員会 2013

平成 24 年度授業アンケート報告書①

文責・報告者：渡久地朝央（経済学部・講師）

1. 授業アンケート分析の概要

平成 24 年度のアンケートは前期・後期の 2 区分であり、質問数は前期 12 問、後期 27 問となっている。アンケートの質問構成は、授業評価項目（Input）に関する質問は前期 8 問、後期 12 問、授業終了時に関する評価項目（Output）は前期 4 問、後期 15 問である。

授業全体の評価は学部学科とも既に指標化されていることから、本報告では旧アンケートと 2013 年後期から始まった新アンケートに関する授業評価の変化について、その要因分析を主体に報告を行う。

これにあたり、新旧のアンケートの質問構成から共通している授業評価項目（Input）において主成分分析を行うことでその評価要因を比較する。授業評価の構成要因の設定は、前期の旧アンケートの授業評価項目（Input）問 1 から問 8 及び授業終了時に関する評価項目（Output）の問 9 及び問 10 の計 10 項目を授業評価の構成要因とした。

後期の新アンケートは授業評価項目（Input）問 1 から問 12 を授業評価の構成要因とした。（構成要因の設定は以下のアンケート質問概要（前期・後期）を参照。また、「問」は以下、Q と記載する。）

また、新アンケートに付加された学生側を対象とした新項目に対しても分析を行う。

新アンケートに付加された項目である Q13 から Q26 は、「授業で学んだことが日常生活や社会生活で役に立った」や、「授業内容について自分なりに調べてみようと思うようになった」といった学生が授業を受けて抱いた意識変化や感想を対象とした項目である。

これら新アンケートに付加された学生側を対象とした内容の項目に対して改めて主成分分析を行うことで、学生の授業に対する意識及び感想の評価要因について一定の推測を行う。項目の Q27 は担当講師のオプション項目であるため除外する。また、Q23 は学生自身の授業への出席状況を 5 段階評価で調べた項目で、Q24 は学生自身の授業に関する予習時間を 5 段階評価で調べた項目であることから、学生自身の要因が大きく Q23 及び Q24 は他の項目とは独立した項目と認知した方がよい。しかし、他の項目との相関を調べるために一応、変数として分析範囲に入れている。

また、本報告書の分析においての注意点としては、新旧の別アンケートの比較であることから前期・後期の質問数が違う点、アンケート対象の授業及び教師、生徒、生徒数が前

期・後期で異なる点に留意したい。

表1 アンケート質問概要 (前期)

評 価 項 目	
1	先生の話はよく聞こえましたか (声の大きさ、マイクの使い方など)
2	先生の黒板等 (板書代わりにOHP、パワーポイント、ファイルなど含む) の使い方は適切でしたか
3	先生は学生の理解を助ける手段 (テキスト、プリント、OHP、VTR、インターネットなど) を適切に用いましたか
4	先生の授業中の私語・携帯電話使用などの迷惑行為への対応はどうでしたか
5	先生は発言や質問の機会を設け、適切に対応していましたか
6	毎回の授業の構成はまとまっていたか
7	先生の授業内容はシラバスに沿ってまいりましたか
8	先生の授業内容の分量はどうでしたか
Input (設問1~8) 項目の平均値	
9	あなたのこの科目への取り組みはどうでしたか
10	授業の内容をよく理解できましたか
11	この授業を通して講義のテーマに関心を持つことができましたか
12	この授業について総合的にどう評価しますか
Output (設問9~12) 項目の平均値	

表2 アンケート質問概要 (後期)

評 価 項 目	
1	担当教員の話はよく聞こえた (声の大きさ、マイクの使い方など)
2	黒板など (板書代わりにOHP、パワーポイント、ファイルなどを含む) の使い方は適切であった
3	担当教員は学生の理解を助ける手段 (テキスト、プリント、OHP、VTR、インターネットなど) を適切に用いていた
4	配付資料 (レジュメなど) が授業内容の理解に役立った
5	授業のペースが、私にとって適切だった
6	授業の分量 (内容・板書など) が、私にとって適切だった
7	毎回の授業の構成はまとまっていた
8	授業内容はシラバスに沿っていた
9	担当教員は授業中の私語・携帯電話使用などの迷惑行為に、適切に対応していた
10	担当教員は発言や質問の機会を設け、適切に対応していた
11	授業の中で前回の内容の振り返りがあり理解を深める工夫があった
12	この授業で学問のおもしろさを感じることができた
科目の授業全体 (設問1~12項目) の平均値	
13	授業で学んだことを自分なりに例をあげて話せるようになった
14	授業で学んだことが日常生活や社会生活に役立った
15	授業内容について質問できるようになった
16	授業で学んだことを身近な出来事に結びつけて考えるようになった
17	授業内容を自分なりの言葉でノートにまとめられた
18	授業で学んだ個々の知識を結びつけて理解するようになった
19	この授業を通して知りたかったことが学べた
20	授業内容が十分に理解できた
21	授業内容について自分なりに調べてみようと思うようになった
22	この授業に関連する分野をこれからも、もっと学びたい
23	この授業の出席状況 (実際に出席した割合) について下記の選択肢から選んでください (①60%以下、②70%程度、③80%程度、④90%程度、⑤皆出席)
24	この授業における1週間の予習復習の合計時間を次の選択肢から選んでください (①1時間未満、②1時間程度、③2時間程度、④3時間程度、⑤3時間以上)
25	総合的にみて、この授業を受けてよかったと思う
26	総合的にみて、この授業は自分にとって役に立った
あなた自身の学び (設問13~26項目) の平均値	
27	オプション (担当教員から設問、選択肢についての指示があります)

2. 旧アンケートと新アンケートにおける授業評価の結果

新旧のアンケートの質問構成から共通している授業評価項目（Input）を対象に学生の授業に対する評価要因を比較する。

授業評価の構成要因の設定は前述した通り、前期の旧アンケートの授業評価項目（Input）Q1 から Q8 及び授業終了時に関する評価項目（Output）の Q9 及び Q10 の計 10 項目を授業評価の構成要因である。

後期の新アンケートは授業評価項目（Input）Q1 から Q12 を授業評価の構成要因とした。

まず、各学科のアンケートの対象者数は以下の通りである。学科及び前期・後期の対象者数の違いに留意したい。

アンケート対象者数				
	産業情報		企業システム	
前期	1842		1840	
後期	2084		1346	
	法学科		地域行政	
前期	1027		1939	
後期	760		1567	
	経済		地域環境	
前期	849		978	
後期	597		1143	
	英米	社会文化	日本文化	人間福祉
前期	3988	1845	1392	2548
後期	3167	1669	1018	2558

つぎに、後に述べる主成分の数が妥当であることを示すために各学科の主成分寄与率を前期・後期に分けて一覧とした。各学科及び前期・後期の主成分寄与率は主成分 No2 までで 50%を超えていることが確認された。

主成分寄与率(前期)				主成分寄与率(後期)					
	産業情報		企業システム		産業情報		企業システム		
主成分No1	44.49%		46.59%	主成分No1	52.26%		47.53%		
主成分No2	10.33%		9.45%	主成分No2	7.60%		15.46%		
	法学科		地域行政		法学科		地域行政		
主成分No1	50.09%		48.22%	主成分No1	58.45%		59.48%		
主成分No2	8.98%		8.83%	主成分No2	9.01%		7.26%		
	経済		地域環境		経済		地域環境		
主成分No1	45.20%		49.27%	主成分No1	52.82%		56.21%		
主成分No2	10.24%		9.47%	主成分No2	7.88%		63.09%		
	英米	社会文化	日本文化	人間福祉		英米	社会文化	日本文化	人間福祉
主成分No1	48.73%	42.95%	41.99%	46.14%	主成分No1	53.69%	51.37%	46.28%	50.29%
主成分No2	8.96%	9.56%	9.57%	9.76%	主成分No2	6.51%	8.75%	9.02%	8.02%

旧アンケートと新アンケートの授業評価項目 (Input) に対する分析結果は、以下のとおりである。

主成分分析の結果(前期)

産業情報		
主成分No1	Q6	
負荷量	0.794	
主成分No2	Q4	Q9
負荷量	-0.487	-0.484

企業システム		
主成分No1	Q3	Q6
負荷量	0.754	0.799
主成分No2	Q1	Q9
負荷量	-0.477	0.460

法学科		
主成分No1	Q2	Q10
負荷量	0.814	0.800
主成分No2	Q4	Q7
負荷量	0.557	0.521

地域行政		
主成分No1	Q6	Q10
負荷量	0.799	0.784
主成分No2	Q4	Q9
負荷量	0.453	0.479

英米			
主成分No1	Q2	Q3	Q6
負荷量	0.770	0.779	0.803
主成分No2	Q1	Q4	
負荷量	-0.443	0.464	

社会文化		
主成分No1	Q6	
負荷量	0.766	
主成分No2	Q1	
負荷量	-0.515	

日本文化		
主成分No1	Q3	Q6
負荷量	0.737	0.744
主成分No2	Q9	Q10
負荷量	-0.570	-0.389

人間福祉		
主成分No1	Q6	
負荷量	0.792	
主成分No2	Q4	Q9
負荷量	0.517	0.555

経済		
主成分No1	Q6	Q10
負荷量	0.755	0.768
主成分No2	Q1	Q4
負荷量	-0.501	0.591

地域環境		
主成分No1	Q6	
負荷量	0.794	
主成分No2	Q4	Q9
負荷量	-0.487	-0.484

主成分分析の結果(後期)

産業情報		
主成分No1	Q7	
負荷量	0.813	
主成分No2	Q4	
負荷量	0.669	

企業システム		
主成分No1	Q7	
負荷量	0.804	
主成分No2	Q2	Q3
負荷量	0.711	0.713

法学科		
主成分No1	Q7	
負荷量	0.841	
主成分No2	Q4	
負荷量	0.680	

地域行政		
主成分No1	Q7	
負荷量	0.859	
主成分No2	Q10	
負荷量	0.502	

英米		
主成分No1	Q7	Q6
負荷量	0.824	0.799
主成分No2	Q5	
負荷量	-0.476	

社会文化		
主成分No1	Q7	
負荷量	0.833	
主成分No2	Q9	Q10
負荷量	0.590	0.610

日本文化		
主成分No1	Q7	
負荷量	0.814	
主成分No2	Q5	Q6
負荷量	-0.568	-0.558

人間福祉		
主成分No1	Q7	
負荷量	0.809	
主成分No2	Q3	Q4
負荷量	0.468	0.460

経済		
主成分No1	Q6	Q7
負荷量	0.804	0.826
主成分No2	Q9	Q10
負荷量	0.483	0.454

地域環境		
主成分No1	Q6	Q7
負荷量	0.834	0.836
主成分No2	Q4	Q9
負荷量	-0.396	0.464

旧アンケートの分析結果を述べると、各学科の主成分 No1 に Q6 が多く見られる傾向にある。(Q6「毎回の授業の構成はまとまっていたか」)

以下に、各学科の授業評価に対する評価要因をまとめる、正の評価は同じ評価が多く冗長になるため負の評価を中心にデータ解釈を記載する。

産業情報学科は、主成分 No1 に Q6 で、主成分 No2 に Q4, Q9 であるが、Q4 及び Q9 は負の評価となっている。Q4 は私語等への注意が適切であったかどうかという項目であるので、一定の授業環境を保つための指導を学生側も望んでいることが推測される。Q9 に関しては、学生自身の授業への取り組み姿勢を尋ねる項目であるので、授業自体の評価とは別の学生側の要因であろう。

企業システム学科は、主成分 No1 に Q3, Q6 で、主成分 No2 に Q1, Q9 で、Q1 のみ負の評価となっている。Q1 は教師の声量に関する項目であることからマイク等を使用するなどの改善を行えば良いと思われる。

法学科は、主成分 No1 に Q2, Q10 で、主成分 No2 に Q4, Q7 で、負の評価は見られない。

地域行政学科は、主成分 No1 に Q6, Q10 で、主成分 No2 に Q4, Q9 で、負の評価は見られない。

英米言語学科は、主成分 No1 に Q2, Q3, Q6 で、主成分 No2 に Q1, Q4 で、Q1 のみ負の評価となっている。Q1 は教師の声量に関する項目であることからマイク等を使用するなどの改善を行えば良いと思われる。

社会文化学科は、主成分 No1 に Q6 で、主成分 No2 に Q1 で、Q1 のみ負の評価となっている。Q1 は教師の声量に関する項目であることからマイク等を使用するなどの改善を行えば良いと思われる。

日本文化学科は、主成分 No1 に Q3, Q6 で、主成分 No2 に Q9, Q10 で、Q9 のみ負の評価となっているが、Q9 は学生自身の授業への取り組み姿勢を尋ねる項目であるので、授業自体の評価とは別の学生側の要因であろう。

人間福祉学科は、主成分 No1 に Q6 で、主成分 No2 に Q4, Q9 で、負の評価は見られない。

経済学科は、主成分 No1 に Q6, Q10 で、主成分 No2 に Q1, Q4 で、Q1 のみ負の評価となっている。Q1 は教師の声量に関する項目であることからマイク等を使用するなどの改善を行えば良いと思われる。

地域環境学科は、主成分 No1 に Q6 で、主成分 No2 に Q4, Q9 で、Q4, Q9 が負の評価となっている。Q4 は私語等への注意が適切であったかどうかという項目であるので、一定の授業環境を保つための指導を学生側も望んでいることが推測される。Q9 に関しては、学生自身の授業への取り組み姿勢を尋ねる項目であるので、授業自体の評価とは別の学生側の要因であろう。

次に新アンケートの分析結果を述べると、各学科の主成分 No1 に Q7 が多く見られる傾向にある。(Q7「毎回の授業の構成はまとまっていたか」)

以下に、各学科の授業評価に対する評価要因をまとめる、同様に負の評価を中心にデータ解釈を記載する。

産業情報学科は、主成分 No1 に Q7 で、主成分 No2 に Q4 である。負の評価は見られない。

企業システム学科は、主成分 No1 に Q7 で、主成分 No2 に Q2, Q3 である。負の評価は見られない。

法学科は、主成分 No1 に Q7 で、主成分 No2 に Q4 である。負の評価は見られない。

地域行政学科は、主成分 No1 に Q7 で、主成分 No2 に Q10 である。負の評価は見られない。

英米言語学科は、主成分 No1 に Q6, Q7 で、主成分 No2 に Q5 で、Q5 のみ負の評価となっている。Q5 は授業のペースに関する項目である。

社会文化学科は、主成分 No1 に Q7 で、主成分 No2 に Q9, Q10 である。負の評価は見られない。

日本文化学科は、主成分 No1 に Q7 で、主成分 No2 に Q5, Q6 である。Q5, Q6 で負の評価が見られた。Q5 は授業のペースに関する項目で、Q6 は授業の分量(内容・板書)に関する項目である。

人間福祉学科は、主成分 No1 に Q7 で、主成分 No2 に Q3, Q4 で、負の評価は見られない。

経済学科は、主成分 No1 に Q6, Q7 で、主成分 No2 に Q9, Q10 で、負の評価は見られない。

地域環境学科は、主成分 No1 に Q6, Q7 で、主成分 No2 に Q4, Q9 である。Q4 が負の評価となっている。Q4 は配布資料に関する項目である。

旧アンケート及び新アンケートの授業評価項目(Input)を対象とした学生の授業に対する評価要因では、その多くに旧アンケート Q6「毎回の授業の構成内容はどうでしたか」、新アンケート Q7「毎回の授業の構成内容はどうでしたか」が見られるという結果になった。旧アンケートの授業評価項目(Input)部分において、新アンケートでも同様の分析結果が得られたことから新アンケートは旧アンケートを代替していると推測される。

今回の分析において新旧アンケート共に最も指摘される「授業の構成内容」が、授業の流れを指すのか、シラバスに沿った授業構成を指しているのか、といった具体的なことまでは本分析ではわからない。

しかし、これだけ多くの学科において学生から評価される項目であることは明らかであるため、この項目に対するより詳細な要因分析を進めて、授業の改善を促す具体的な事象を特定することが今後必要と思われる。

3. 新アンケートの分析結果について

本節では新アンケートで新たに付加された学生側を対象とした新項目に対して分析を行う。

新アンケートに付加された項目である Q13 から Q26 は、「授業で学んだことが日常生活や社会生活で役に立った」や、「授業内容について自分なりに調べてみようと思うようになった」といった学生が授業を受けて抱いた意識変化や感想を対象とした項目である。

これら新アンケートに付加された学生側を対象とした内容の項目に対して改めて主成分分析を行うことで、学生の授業に対する意識及び感想の評価要因について一定の推測を行う。ただし、項目の Q27 は担当講師のオプション項目であるため除外する。

また、Q23 は学生自身の授業への出席状況を 5 段階評価で調べた項目で、Q24 は学生自身の授業に関する予習時間を 5 段階評価で調べた項目であることから、学生自身の要因が大きく Q23 及び Q24 は他の項目とは独立した項目と認知した方がよい。しかし、他の項目との相関を調べるために一応、変数として分析範囲に入れた。

まず、先ほどと同様に主成分の数が妥当であることを示すため、各学科の主成分寄与率を示す。各学科及び前期・後期の主成分寄与率は主成分 No2 までで 50%以上を超えていることが確認された。アンケートと対象者数は先述の後期と同じである。

主成分寄与率(後期)

	産業情報	企業システム
主成分No1	56.61%	50.71%
主成分No2	7.54%	10.70%

	法学科	地域行政
主成分No1	58.98%	60.18%
主成分No2	7.09%	7.30%

	経済	地域環境
主成分No1	56.06%	57.46%
主成分No2	8.32%	7.95%

	英米	社会文化	日本文化	人間福祉
主成分No1	54.59%	54.55%	52.91%	50.83%
主成分No2	7.48%	7.51%	7.48%	8.38%

新アンケートの学生側を対象とした内容の項目を分析した結果は以下の通りである。

各学科において特に Q18、Q19 を挙げるものが多く、次いで Q20、Q21 と、授業を受講したことにより、授業内容を理解して知識となったという感想を抱いていることが推測される。(Q18「授業で学んだ個々の知識を結びつけて考えるようになった」、Q19「この授業を通して知り

たかったことが学べた」、Q20「授業内容が十分に理解できた」、Q21「授業内容について自分なりに調べてみようと思うようになった」)

また、独立した項目と予想された Q23, Q24 を主成分 No2 に挙げる学生も多くみられるが、これらの項目は学生自身の問題であるために他の項目との相関は非常に低かった。

(Q24「この授業の自身の出席状況」、Q25「この授業における予習復習の合計時間」)

(冗長となるので全学科分は記載しないが産業情報学科の結果を例として後述に提示する。)

新アンケートの主成分分析の結果(後期)

産業情報			法学科		
主成分No1	Q18	Q19	主成分No1	Q19	Q20
負荷量	0.847	0.843	負荷量	0.871	0.863
主成分No2	Q24		主成分No2	Q23	
負荷量	0.639		負荷量	0.745	
企業システム			地域行政		
主成分No1	Q19	Q21	主成分No1	Q18	Q19
負荷量	0.820	0.815	負荷量	0.865	0.879
主成分No2	Q25	Q26	主成分No2	Q24	
負荷量	-0.534	-0.488	負荷量	0.794	
(*位置バイアス発生)					
英米			日本文化		
主成分No1	Q19		主成分No1	Q19	
負荷量	0.849		負荷量	0.857	
主成分No2	Q24		主成分No2	Q24	
負荷量	0.603		負荷量	0.604	
社会文化			人間福祉		
主成分No1	Q26		主成分No1	Q18	Q20
負荷量	0.832		負荷量	0.813	0.819
主成分No2	Q24		主成分No2	Q24	
負荷量	0.770		負荷量	0.714	
経済			地域環境		
主成分No1	Q18	Q19	主成分No1	Q19	Q21
負荷量	0.844	0.887	負荷量	0.869	0.862
主成分No2	Q18		主成分No2	Q13	Q23
負荷量	0.548		負荷量	0.506	-0.487

各学科において、負の評価はほとんどみられないことから各学科の記載は省略する。負の評価を示している箇所だけを述べると、地域環境政策学科の Q23 は先述の学生の授業に対する出席状況についてである。また、企業システムにおいて Q25, Q26 が負の評価となっているが、これは主成分 No1 の評価と矛盾している点と Q25, Q26 が他の項目と相関が見られない点から、Q27 の講師によるオプション質問に対象者が誘引されて位置バイアス

が発生したと推測される。(企業システムの Q27 のオプション質問における質問内容は講師によって異なるであろうし、本分析に使用したデータには質問内容の記載がないことから詳細は不明であるが、学生のコメントに一部ネガティブな回答があったことから先述の推測のように Q27 の質問内容に Q25, Q26 が誘引されたと推測される。)

4. 授業アンケートの分析結果について

本報告では旧アンケートと 2013 年後期から始まった新アンケートに関する授業評価の変化について、その要因分析を主体に分析結果を列挙した。

まず、旧アンケート及び新アンケートの授業評価項目 (Input) を対象とした学生の授業に対する評価要因では、その多くに旧アンケート Q6「毎回の授業の構成内容はどうでしたか」、新アンケート Q7「毎回の授業の構成内容はどうでしたか」が見られるという結果になり、旧アンケートの授業評価項目 (Input) 部分において、新アンケートでも同様の分析結果が得られたことから新アンケートは旧アンケートを代替していると推測される。

次に新アンケートに新たに付加された学生側の授業評価については、各学科において特に Q18「授業で学んだ個々の知識を結びつけて考えるようになった」及び、Q19「この授業を通して知りたかったことが学べた」が多く挙げられていた。

課題としては、新旧アンケート共に最も指摘される「授業の構成内容」が、何を具体的に指しているのかという点、新アンケートに位置バイアスが発生した点である。

今後、「授業の構成内容」をより詳細に解明するような質問項目を設定することが授業改善を促す上で必要と思われる。また、企業システムでみられた位置バイアスを防ぐために Q27 のオプション質問の設定には注意が必要である。

[補足資料]

産業情報学科の例としたQ23, Q24と他の項目との相関

	問12	問13	問14	問15	問16	問17	問18	問19
問12	1.0000							
問13	0.6243	1.0000						
問14	0.6135	0.6748	1.0000					
問15	0.5945	0.7291	0.6585	1.0000				
問16	0.5484	0.6069	0.6624	0.5612	1.0000			
問17	0.3555	0.4424	0.4383	0.4397	0.4966	1.0000		
問18	0.6341	0.6304	0.6220	0.6287	0.6961	0.5064	1.0000	
問19	0.6683	0.5625	0.6113	0.5775	0.6011	0.4053	0.7009	1.0000
問20	0.6551	0.5750	0.5920	0.5694	0.5995	0.4055	0.6890	0.7346
問21	0.6190	0.6037	0.5783	0.5962	0.5955	0.4338	0.6780	0.6885
問22	0.6265	0.5603	0.5598	0.5516	0.5627	0.3732	0.6395	0.6759
問23	0.2349	0.2397	0.2163	0.2454	0.2334	0.1987	0.2872	0.3138
問24	0.2405	0.3383	0.2925	0.3824	0.2979	0.3691	0.3322	0.2698
問20	問21	問22	問23	問24	問25	問26		

1.0000							
0.6702	1.0000						
0.6411	0.7158	1.0000					
0.2984	0.2728	0.2854	1.0000				
0.2905	0.3493	0.3062	0.1851	1.0000			
0.6850	0.6289	0.6639	0.3122	0.2133	1.0000		
0.6829	0.6371	0.6821	0.3145	0.2356	0.8155	1.0000	

Q23, Q24 は上記のように他の項目と低い相関関係であることがわかる。産業情報学科だけでなく、他の学科でもこれは同様であった。